

鈕雨亭隨筆卷下

伊勢東聚伯頌著

李白贈汪倫詩云李白乘舟將欲行忽聞岸上踏歌聲桃花潭水深千尺不及汪倫送我情起句突出硬語橫空然以汪倫結之前後呼應真爲傑作杜甫送孔巢父詩破題云巢父掉頭不肯住末段南尋禹穴見李白消甫問訊今何如韓愈詩云孟郊死葬北邙山日月風雲頓覺閑天恐文章還斷絶再生賈島在入關三子步驟一轍孫賚送河都闕詩酒酣耳熱悲故鄉孫賚在坐情更傷又云三郎今年三十幾平生與賚最知己亦同又有不

鈕雨亭隨筆卷下

李白的汪倫に贈る詩に云ふ李白舟に乗つて將に行かんと欲す忽ち聞く岸上踏歌の聲桃花潭水深さ千尺なるも及ばず汪倫が我を送るの情にと起句突出硬語橫空然れども汪倫を以て之れを結ぶ前後呼應眞に傑作と爲す杜甫の孔巢父を送る詩の破題に云ふ巢父頭を掉つて肯て住らず」と末段に南尋禹穴を尋ねて李白を見れば道へ甫問訊す今何如んと韓愈の詩に云ふ孟郊死して北邙山に葬る日月風雲頓に閑なるを覺ゆ天文章の還た斷絶せんを恐る賈島を再生して人間に在らしむと三子の步驟一轍なり孫賚の河都闕を送る詩に酒酣に耳熱して故郷を悲む孫賚坐に在つて情更に傷む又云ふ三郎今年三十幾平生與賚と最も知己亦同じ又此の格に拘らずして直に時事を記する者あり毛奇齡の柳敬亭に贈る詩に云ふ流落相憐む柳敬亭豪氣を消除し

一三五

拘此格直記時事者、毛奇齡贈柳敬亭詩云、流落相憐柳敬亭、消除豪氣鬢星星、江南多少前朝事、說與人間不忍聽、大欠工夫。

橘窓茶話云、蘇頌詩、東望望春、春可憐、孫連云、上望字向東望也、下望字望春色也、按岑嘉州詩、東望望長安、疊用望字、與此同法、然此首奉和幸望春宮之作、乃以望春爲宮名者、穩也。

兩芳洲曰、作詩如做手簡、見一般、略言之、有始中終三等、細言之、一二三四五六各有次序、但據事直書、平平鋪將去、謂之手簡、借著風雲雪月山河草木來形容、錯綜成章、語言不多、意思有餘、又清雅、又響亮、謂之詩、手簡如段匹、織得容易、詩如錦繡、最要織麗、此語

て鬢星々、江南多少前朝の事、人間に說與して聽くに忍びず」と大に工夫を缺く。

橘窓茶話に云ふ、蘇頌の詩に、東望して春を望めば春憐む可し、孫連云ふ、上の望の字は、東に向ひて望むなり、下の望の字は、春色を望むなりと、按ずるに、岑嘉州の詩に「東望して長安を望む」と、望の字を疊用す、此れと同法と、然れども、此の首、望春宮に幸するの作に奉和す、乃ち望春を以て宮の名と爲すは、穩なり。

兩芳洲曰く、詩を作るは、手簡を做ふ兒の如く一般、略して之れを言へば、始中終の三等あり、細に之を言へば一二三四五六各次第あり、但だ事に據りて直に書す、平々鋪き將ちて去る、之れを手簡と謂ふ、風雲雪月山河草木を借著し來りて形容し、錯綜章を成し、語言多からず、意思餘有り、又清雅、又響亮、之れを詩と謂ふ、手簡は段匹の如し、織り得て容易、詩は錦繡の如し、最も織麗を要すと、此の語、直截痛快、實に作詩の妙訣と爲す、初學の徒、兼句

直截痛快、實爲作詩妙訣、初學之徒、得隻句
或一聯、前後補綴以成全篇、不得血脉貫通
也。

杜少陵漫興詩云、糝逕楊花鋪白氈、點溪荷
葉疊青錢、竹根稚子無人見、沙上鳧雛傍母
眠、稚子或以爲笋、或以爲竹籬、或曰、甫有二
子、一曰宗文字稚子、竝非、稚一作雉、此首全
對、雉子鳧雛最確。

靜志居詩話、杜子美集有漫興五絕九首、又
七言云、老去詩篇渾漫興、春來花鳥莫深愁、
渾漫興者、言卽景口占率意而作也、其後蘇
子瞻黃魯直楊廷秀諸公皆襲用之、押入語
韻、姜堯章詠蟋蟀詞云、幽詩漫興、吟籬落呼
燈、世間兒女、段復之詞云、詩句一春渾漫興、

或は一聯を得、前後細綴し以て全篇を成さば、血脉貫通
するを得ざるなり。

杜少陵の漫興の詩に云ふ、逕に糝する楊花白氈を鋪き、
溪に點する荷葉青錢を疊む、竹根の稚子人の見る無し、
沙上の鳧雛母に傍ふて眠ると、稚子、或は以て笋と爲
し、或は以て竹籬と爲す、或は曰く、甫に二子あり、一は宗
文字は稚子と曰ふと、竝に非なり、稚、一に雉に作る、此
の首、全對、雉子鳧雛最も確なり。

靜志居詩話に、杜子美の集に、漫興五絕九首あり、又、七言
に云ふ、老去つて詩篇渾て漫興、春來花鳥深く愁ふる莫
しと、渾べて漫興とは、卽景口占率意にして作るを言ふ
なり、其の後、蘇子瞻、黃魯直、楊廷秀の諸公、皆之れを襲用
す、押して語の韻に入る、姜堯章の蟋蟀を詠する詞に云
ふ、幽詩漫興、吟籬落燈を呼ぶ、世間の兒女、段復之の
詞に云ふ、詩句一春渾て漫興、紛々たる紅紫、俱に塵土と、
陰時夫、韻府群玉を輯する、亦采りて語の字の韻中に入

紛紛紅紫俱塵土、陰時夫輯韻府群玉、亦采入語字韻中、蓋元以前無讀作漫興者、迨楊廉夫作漫興七首、妄謂學杜者必先薄其性情語言、而後可得其性情語言、必自其漫興始、而其弟子吳復見心從而傳會之、注云、漫興者、老杜在浣花溪之所作也、漫興之爲言、蓋卽眼前之景、以爲漫成之辭、其言語似村而未始不俊、此杜體之最難學者、自楊廉夫出、而世之人遂盡改杜集之舊、易與爲興、首沿其誤者、張孟兼也。

歸雁本稱春雁、然秋亦用之、猶歸鴉之歸也、林子來詩、露華霜荷落、晚風數行歸雁下、秋空吾輩賦、秋日詩、用歸雁字、讀者無不嗤笑、黃花本稱菊花、又稱菜花、沉德潛曰、劉宗濬

る、蓋元以前は、讀みて漫興と作す者無し、楊廉夫、漫興七首を作るに迫びて、妄に謂ふ、杜を學ぶ者は、必ず其の性情語言を得て、而して後に其の性情語言を得べし、必ず其の漫興より始むと、而して其の弟子、吳復見、心從して而して之れに傳會す、注に云ふ、漫興は、老杜の浣花溪に在るときに作りし所なりと、漫興の言たる、蓋、卽ち眼前の景、以て漫成の辭と爲す、其の言語、村なるに似て、而して未だ始めより俊ならずんばならず、此れ杜體の最も學び難き者、楊廉夫出でしより、而して世の人、遂に盡く杜集の舊を改め、與を易へて興と爲す、首めて其の誤りを沿する者は、張孟兼なり。

歸雁は、本と春雁を稱す、然れども、秋にも亦之れを用ふ、猶ほ歸鴉の歸のごときなり、林子來の詩に、露華霜荷晚風に落つ、數行の歸雁秋空を下ると、吾が輩、秋日の詩を賦し、歸雁の字を用ひば、讀者嗤笑せざるは無し、黃花は、本と菊花を稱す、又、菜花を稱す、深德潛曰く、劉宗濬の菜

看菜花詩云、乍逢紅雨點廻塘、又見平畦千頃黃、色比散金無異種、香連繡壤不分疆、已娛老眼消春晝、旋引歸心立夕陽、燕麥兔葵無感觸、不須佳句憶劉郎、張翰青條若搥翠、黃花如散金、指春日黃花也、唐代以黃花句、試士、通場皆指菊花、無一合者、故太白云、張翰黃花句、風流五百年、詩中第三語本此。

陸放翁入蜀記、太白登黃鶴樓送孟浩然詩云、孤帆遠映碧山盡、惟見長江天際流、蓋帆檣映遠山、尤可觀、非江行久不能知也、按李于鱗唐詩選、映作影、山作空、非矣、既曰碧空、又曰天際、語且重複、意亦索然、是類甚多、不可枚舉、南郭附言、兩可難裁、從其多且正者、是亦妄耳。

銀雨亭隨筆卷下

花を看る詩に云ふ、乍ち紅雨の廻塘に點するに逢ふ、又見る平畦千頃の黃、色は散金に比して異種無く、香は繡壤に連りて疆を分たず、已に老眼を娛まして春晝を消す、旋て歸心を引きて夕陽に立つ、燕麥兔葵感觸する無し、須ひず佳句劉郎を憶ふを、張翰の「青條翠を搥ぶるが若く、黃花金を散するが如し」は、春日の黃花を指すなり、唐代、黃花の句を以て士を試む、通場皆菊花を指す、一も合ふ者無し、故に太白云ふ、張翰黃花の句、風流五百年、詩中の第三語、此に本づく。

陸放翁の入蜀記に、太白黃鶴樓に登り孟浩然を送る詩に云ふ、孤帆遠く碧山に映じて盡き、惟だ見る長江の天際に流るを、蓋、檣遠山に映ず、尤も觀るべし、江行の久しきに非ざれば、知ると能はずと、按するに、李于鱗の唐詩選に、映を影に作り、山を空に作るは、非なり、既に碧空と曰ひ、又天際と曰ふ、語且つ重複し、意も亦索然たり、是の類甚だ多し、枚舉す可らず、南郭附言に兩可にして裁し難きは、其多く且つ正しき者に從ふと、是も亦妄のみ。

魏孝文帝太和十二年詔曰、日月薄蝕、陰陽之恆度耳、聖人懼人君之放怠、因之以說戒、故稱日蝕修德、月蝕修刑、胡主亦有卓見。

李景珍嘗謂人曰、吾所以好讀書、不求身後之名、異聞異見心之所願、是以孜孜搜討、欲罷不能、豈爲聲名勢七尺也、此乃天性、非爲力強、余之於讀書、亦是同癖、非求身後之名、富商大賈有讀書生、勿以簿帳爲俗、以置度外、諺云、一日不書、百事荒蕪、破產之人、必忽簿帳。

祖元珍曰、文章須自出機杼、成一家風骨、何能共人同生活也、蓋譏世人好像他文、以爲己用、余才庸劣、毫無所成、但願欲做吾詩、硬語拙句、所不辭也。

魏の孝文帝、太和十二年、詔して曰く、日月薄蝕は、陰陽の恆度のみ、聖人、人君の放怠するを懼れ、之れに因りて以て戒を設く、故に日蝕には、徳を修め、月蝕には、刑を修むと稱すと、胡主も亦卓見あり。

李景珍嘗て人に謂ひて曰く、吾が好みて書を讀む所以は、身後の名を求むるにあらず、異聞異見、心の願ふ所、是を以て孜孜搜討す、罷めんと欲して罷はず、豈に聲名の爲に七尺を勞せんや、此れ乃ち天性なり、力強を爲すに非ずと、余の讀書に於ける、亦是れ同癖、身後の名を求むるに非ず。

富商大賈、讀書生有るも、簿帳を以て俗と爲し、以て度外に置くこと勿れ、諺に云ふ、一日書せざれば、百事荒蕪すと、産を破る人は、必ず簿帳を忽にす。

祖元珍曰く、文章は須らく自ら機杼を出し、一家の風骨を成すべし、何ぞ能く人と共に生活を同くせん、蓋世人の好みて他文を偷みて以て己の用と爲すを譏れるなり、余才庸劣、毫も成る所無し、但だ願くば吾が詩を做さんと欲す、硬語拙句も辭せざる所なり。

戴益詩云、盡日尋春不見春、茆鞋踏遍隴頭雲、歸來適過梅花下、春在枝頭已十分、孟子曰、道在邇而求諸遠、凡學道者、要在自修、不必求之高遠、古人每於活處觀理、此詩與也、題云探春、然非漫爾之作、羅景綸曰、詩莫尙乎興、興者因物感觸、言在於此、而意寄於彼、玩味乃可識、非若賦比之直言其事也、鶴林玉露載此、爲尼悟道詩、第三句、作歸來笑撚梅花嗅、不及過梅花下之自然、眞性之詩、湧金門外柳垂金、三日不來成綠陰、折取一枝入城去、使人知道已春深、亦得言外之味、益叔亮隱于南島、以詩授島中少年、有稍嫻聲律者、脇喜字伯慶、冬夜吟云、寒宵客到煖新醅、爐畔閑傾一兩杯、坐久愈憐山月白、數

組雨亭隨筆卷下

戴益の詩に云ふ、盡日春を尋ねて春を見ず、茆鞋踏み遍し隴頭の雲、歸來適梅花の下を過ぐ、春は枝頭に在つて已に十分と、孟子曰く、道は邇きに在りて而して諸れを遠きに求むと、凡そ道を學ぶ者は、要する處、自修に在り、必ずしも之を高遠に求めず、古人毎に活處に於て理を觀る、此の詩は興なり、題して探春と云ふ、然れども、漫爾の作に非ず、羅景綸曰く、詩は興より尙きは莫し、興とは、物に因りて感觸し、言、此に在りて、而して意、彼れに寄す、玩味して乃ち識るべし、賦比の直に其の事を言ふが若きに非ざるなり、鶴林玉露に、此れを載せ、尼悟道の詩と爲す、第三句を、歸來笑つて梅花を撚つて嗅ぐに作る、梅花の下を過ぐるの自然なるに及びず、眞性之の詩に、湧金門外柳、金を垂る、三日來らず綠陰を成す、一枝を折り取つて城に入り去り、人をして已に春の深きを知道せしむる、亦言外の味を得たり。

益叔亮、南島に隱れ、詩を以て島中の少年に授く、稍聲律に嫻ぶ者あり、脇喜字は伯慶、冬夜の吟に云ふ、寒宵客到煖新醅を煖む、爐畔閑に傾く一兩杯、坐久くして愈憐、憐む山月の白きを、數枝の梅影窓に上つて來る。

枝梅影上窓來。

菜根吟社課題、初夏卽事賦者若干人、古森守一詩最佳、詩云、客到茅堂與不孤、壁間新挂夏山圖、殘碁算罷閑評畫、已有薰風度碧梧。

三浦大年偶成詩云、自非問奇客、不到子雲亭、白髮千莖雪、青燈一盞螢、眼於經史豁、身在賤貧寧、聊寄生平樂、山肴酌野醞、前聯奇峭有、賈島風、又寄余詩云、勢南羽北各天涯、憶昔上游欠見期、茆屋點粧君識否、壁間多是夢亭詩。

清波雜志、孫莘老請益于歐陽公、公曰、此無他唯勸讀書、而多爲之自工、世人患作文字少、又懶讀書、每一書出、必求過人、如此少有

菜根吟社の課題の初夏卽事賦する者若干人、古森守一の詩最も佳なり、詩に云ふ、客到つて茅堂與孤ならず、壁間新に挂く夏山の圖、殘碁算し罷んで閑に畫を評す、已に薰風の碧梧に度る有り。

三浦大年の偶成の詩に云ふ、奇を問ふの客に非ざる自りは、子雲の亭に到らず、白髮千莖の雪、青燈一盞の螢、眼は經史に於て豁なり、身は賤貧に在つて寧し、聊か寄す生平の樂、山肴野醞を酌む、前聯奇峭、賈島の風あり、又、余に寄する時に云ふ、勢南羽北各天涯、憶昔上游見期を欠く、茆屋點粧す君識るや否や、壁間多くは是れ夢亭の詩。

清波雜志に、孫莘老、益を歐陽公に請ふ、公曰く、此れ他無し、唯だ勸めて書を讀み、而して多く之れを爲らば、自ら工なり、世人、文字を作るの少きを患ふ、又、書を讀むに懶し、一書出づる毎に、必ず人に過ぐることを求む、此くの如くにして、至ること有る者少し、疵病は必ずしも人の

至者、疵病不必待人指摘、多作自見之、蓋揚子雲令桓君山誦千首賦之意、后山詩話云、歐陽永叔謂爲文有三多、看多做多、商量多、三多之中、商量尤難、至其極功、不待人指摘、韓文公南山詩、險語疊出、千古傑作、非大手筆不能辨之、後輩容易看過、不知斡旋之妙、擬擬此等之作、曰、我學韓體、鋪張雜然、無復節制、多見其不知量、謝自然詩、專排白日輕舉之妄、雖曰正大之見、然亦陷于理窟、遂失騷人之旨、又如、是時雨初霽、懸瀑垂天、神、泉、紳、拖、修、白、石、劍、攢、高、青、造、語、俱、奇、吾、曹、學、之、恐、有、畫、虎、之、誚、送、無、本、師、詩、云、姦、窮、怪、變、得、往、往、造、平、淡、此、是、詩、之、正、路、山、石、雉、帶、箭、汁、酒、交、流、三、篇、熟、讀、玩、味、可、以、得、紀、事、之、法、也、

銀雨亭詩筆卷下

指摘を待たず、多く作らば自ら之れを見ると、蓋揚子雲、桓君山をして、千首の賦を誦せしむるの意なり、后山詩話に云ふ、歐陽永叔謂ふ文を爲るに三多有り、看ること多く、做すこと多く、商量すると多く、三多の中、商量尤も難し、其の功を極むるに至りては、人の指摘を待たずと。

韓文公の南山の詩は、險語疊出し、千古の傑なり、大手筆に非ざれば、之れを辨する能はず、後輩容易に看過し、斡旋の妙を知らず、誤に此等の作に擬して曰く、我、韓體を學ぶと、鋪張雜然、復た節制無し、多に其の量を知らざるを見る、謝自然の詩、專ら白日輕舉の妄を排す、正大の見と曰ふと雖、然れども、亦理窟に陥り、遂に騷人の旨を失ふ、又、是の時雨初めて霽れ、懸瀑天神を垂る、泉紳修白を拖き、石劍高青を攢すの如き、造語俱に奇なり、吾が曹之れを學ばし、恐くは畫虎の誚あらん、無本師を送る詩に云ふ、姦窮り怪變じ得、往々平淡に造ると、此れは是れ詩の正路、山石、雉帶箭汁、酒交流の三篇、熟讀玩味せば、以て紀事の法を得べきなり、南溪始泛の三首は、柳々州の南澗中に題すに讓らず、黃山谷、最も此の詩を愛し、以て詩人句律の深意有りと爲す。

南溪始泛三首、不讓柳柳州南澗中題、黃山谷最愛此詩、以爲有詩人句律之深意。

賈長江訪隱者、不遇詩、徐而庵以爲一問三答、語氣甚急、余謂此詩更爲一問二答三問四答、起承轉合、整然不亂、只在二字著眼、蓋長江問童子採藥之言、意謂除卻此山之外、不應他適、因指山爲自斷之辭、曰只在此山中、童子答以山雲甚深、不辨行跡、結句截然、語盡而意無限。

葉石林云、後人但令不斷書種爲鄉黨善人、足矣、若夫成否則天也、吾鄉書種不斷、而稱爲善人者鮮矣。

豫章漫抄云、今人家池塘所畜魚、其種皆出九河、謂之魚苗、或曰魚秧、二名竝奇。

賈長江の隱者を訪ふに遇はずの詩は、徐而庵以て一問三答と爲す、語氣甚だ急なり、余此の詩を講ず、更に一問二答三問四答と爲す、起承轉合、整然として亂れず、只在の二字著眼、蓋長江、童子の藥を採るの言を聞きて、意謂ふ、此の山を除却するの外、應に他に適くべからず、因りて山を指して、自斷するの辭を爲す、曰く、只だ此の山中に在らんと、童子答ふるに山雲甚だ深くして行跡を辨ぜざるを以てす、結句截然、語盡きて而して意限り無し。

葉石林云ふ、後人但だ書種を斷たず、鄉黨の善人と爲らしめば、足れり、若し夫れ成否は則ち天なりと、吾が郷書種斷えず、而して稱して善人と爲す者鮮し。

豫章漫抄に云ふ、今、人家池塘畜ふ所の魚、其の種、皆九河より出づ、之れを魚苗と謂ふ、或は魚秧と曰ふ、二名竝に奇なり。

西京雜記、玉之未理者爲璞、死鼠未屠者亦爲璞、戴植著書名戴璞、蓋本于此。

胡三省曰、沙苑之戰、宇文泰不敢乘勝追高歡、邙山之戰、高歡不敢乘勝追泰、蓋二人者智力相敵、是以相持而不足、以相斃也、余謂信玄之於謙信、亦是智力相敵、互有勝負、遂不能得意、蓋泰歡之類耳。

晁氏客語云、止罵所以助罵、罵罵所以止罵也、此語善悉人情。

前漢夏侯勝傳、章句小儒、破碎大道、近時解經者多駁朱子、不免是弊、張履祥曰、讀書從先儒發明、已極詳盡、但能擇其善者而從之、優柔厭飮期于自得、不當復有著述、徒亂人意、無益于學也、好立文字、是學人一種通病、

西京雜記に、玉の未だ理せざる者を璞と爲す、死鼠の未だ屠らざる者も亦璞と爲す、戴植書を著し、鼠璞と名づく、蓋此に本づく。

胡三省曰く、沙苑の戰に、宇文泰敢て勝に乗じて高歡を追はず、邙山の戰に、高歡敢て勝に乗じて泰を追はず、蓋二人の者智力相敵す、以て相持するに足る、而して以て相斃すに足らざるなり、余謂ふ、信玄の謙信に於ける、亦是れ智力相敵す、互に勝負あり、遂に意を得る能はず、蓋泰歡の類のみ。

晁氏客語に云ふ、罵を止るは、罵を助くる所以、罵を罵るは、罵を止る所以なりと、此の語善く人情を悉せり。

前漢の夏侯勝傳に、章句の小儒、大道を破碎すと、近時經を解する者、多く朱子を駁す、是の弊を免れず、張履祥曰く、書を讀みて、先儒の發明に従ふ、已に極めて詳に盡す、但だ能く其の善なる者を擇びて之れに従ひ、優柔厭飮、自得に期す、當に復た著述する有るべからず、徒に人意を亂り、學に益無きなり、好みて文字を立つるは、是れ學人一種の通病、薛文清曰く、考亭より以還、斯の道大に明

薛文清曰、自考亭以還、斯道大明、無煩著作、須躬行耳。

張洎素與徐鉉厚善、因議事不協、遂絕、然手寫鉉文章、訪求其筆札、藏篋笥甚于珍玩、此與李德裕不讀白居易詩相反、而愛其文才一也。

方薰山靜居畫論云、畫稿謂粉本者、古人於墨稿上、加描粉筆、用時撲入縑素、依粉痕落墨、故名之也、今畫手多不知此義、惟女紅刺繡上、採尙用此法、不知是古畫法也、今人作畫、用柳木炭起稿、謂之朽筆、古有九朽一罷之法、蓋用土筆爲之、以白色土洵澄之、裹作筆頭、用時可逐次改易、數至九而朽定、乃以淡墨就痕描出、拂去土跡、故曰一罷、吾邦近

かなり、著作を煩すこと無し、須らく躬行すべきのみ。

張洎素、徐鉉と厚善なり、事を議して協はざるに因りて遂に絶てり、然れども、鉉の文章を手寫し、其の筆札を訪求し、篋笥に藏す、珍玩より甚し、此れ李德裕の白居易の詩を讀まざると相反す、而して其の文才を愛するは一なり。

方薰山の靜居畫論に云ふ、畫稿を粉本と謂ふは、古人墨稿の上に於て、粉筆を加描し、用ふる時、撲ちて縑素に入れ、粉痕に依りて墨を落す、故に之れを名づくるなり、今畫手多く此の義を知らず、惟だ女紅の刺繡上の様、尙此の法を用ふ、是れ古の畫法なるを知らざるなり、今人畫を作るに、柳木炭を用ひて稿を起す、之れを朽筆と謂ふ、古、九朽一罷の法あり、蓋、土筆を用ひて之れを爲す、白色の土を以て之れを洵澄し、裹みて筆頭を作り、用ふる時、逐次改易すべし、數、九に至りて朽定る、乃ち淡墨を以て痕に就きて描出し、土跡を拂ひ去る、故に一罷と曰ふ、吾が邦、近世の畫家の粉本と稱する所の者は、即ち摹本な

世畫家、所稱粉本者、即摹本也。畫手用朽筆、描摹本背、更以素紙、撫摺其痕、絹則直就、摸本寫之、甚失古法。

韓家藏池大雅二絕句小幅、詩云、帝里風光行處好、就中最好此東山、山近遠花千樹、看去看來乘醉還、祇園言說四時春、況乃烟花三月新、騷客行遊同野客、忙人來往似閑人、題云、右春吟、做白體、書亦然、筆蹟流麗、詩亦可誦、歎云、無名、下有無名連珠印。

錢起雪詩、怒濤堆砌石、新月孕簾鉤、雪積簾鉤、如新月狀、孕字下得妙。

唐伯虎題妓湘英家匾云、風月無邊、見者皆贊美、祝枝山見之曰、此嘲汝輩爲重二也、湘英問其義、枝山曰、風月字無邊、非重二乎、湘

り、畫手、朽筆を用ひて本背を描摹す、更に素紙を以て、其の痕を撫摺す、絹は即ち直に摸本に就きて之れを寫す、甚だ古法を失せり。

韓家に、池大雅の二絶句の小幅を藏す、詩に云ふ、帝里の風光行く處に好し、中に就いて最も好きは此れ東山、山々近遠花千樹、看去り看來つて醉に乗じて還る、祇園言説く四時の春と、況んや乃ち烟花三月の新なるを、騷客行遊野客に同じ、忙人來往閑人に似たり、と題して云ふ、右、春吟、白體に倣ふと、書も亦然り、筆蹟流麗、詩も亦誦すべし、歎に無名と云ふ、下に無名連珠の印あり。

錢起の雪の詩に、怒濤砌石に堆し、新月簾鉤に孕むと、雪、簾鉤に積みて、新月の狀の如し、孕の字、下し得て妙。

唐伯虎の妓湘英の家匾に題して云ふ、風月無邊と、見る者皆贊美す、祝枝山之れを見て曰く、此れ汝が輩を嘲りて重二と爲すなりと、湘英其の義を問ふ、枝山曰く、風月の字、邊無くんば重二に非ずやと、湘英終に以て美と爲

英終以爲美、不之易、按俳諧歲時記云出羽尾花驛里正家所藏角力繪、芭蕉翁句用風月字、蓋祖此意。

東坡雪中過淮、謁客回詩、萬頃穿銀海、千尋度玉峯、又次仲殊雪中遊西湖云、曲終天自明、玉樓已嵯峨、俱言雪景潔白耳、銀海玉樓一聯、注家引道實鑿矣。

本朝南北俱爲皇統、非異邦六朝之比也、當時勤王之師、各尊其主、大義當然、近世學者動以南朝爲正、婉媚辯之、蓋不思之甚也、一書生以芳野懷古詩示余、余題周南峯嶺梅詩還之、詩云、老樹峩峩欲入雲、瘴烟鬢雨客消魂、春風強自分南北、畢竟枝梢共一根。

折用地名如自然者、李士允曉過劉中丞園

して、之れを易へず、按ずるに、俳諧歲時記に云ふ、出羽の尾花驛の里正の家に藏する所の角力の繪、芭蕉翁の句、風月の字を用ゆ、蓋此の意を祖とす。

東坡の雪中淮を過ぎ客に調して回る詩に、萬頃銀海を穿ち、千尋玉峯を度ると、又仲殊の雪中、西湖に遊ぶに次して云ふ、曲終つて天自ら明なり、玉樓已に嵯峨と、俱に雪景の潔白なるを言ふのみ、銀海玉樓の一聯、注家道書を引くは、鑿なり。

本朝の南北俱に皇統たり、異邦の六朝の比に非ざるなり、當時勤王之師、各其の主を尊ぶ、大義當然、然るべし、近世の學者、動もすれば、南朝を以て正と爲し、婉々之れを辯ず、蓋思はざるの甚しきなり、一書生、芳野懷古の詩を以て余に示す、余、周南峯の嶺梅の詩を題して之れを還す、詩に云ふ、老樹峩々雲に入らんと欲す、瘴烟鬢雨客魂を消す、春風強いて自ら南北を分つ、畢竟枝梢は共に一根。

地名を折用して自然の如き者あり、李士允の、曉に劉中

詩、綠深叢相野、香滿白公山、裴度午橋作、別墅、號、綠野堂、白樂天自號、香山居士、又用故事、無痕跡者、唐子西、殘梅詩、興、晚、細草、夢魂、春、上句、用杜詩、東閣官梅、動詩興、下句、用靈運、池塘生春草。

程佳獨坐詩云、空館寂無人、撼撼鳴木葉、乍疑風雨聲、忽見當窓月、乍忽二字、同訓異義、觀此可知。

唐宋之詩、風調自異、然亦不可一概論也、郎瑛曰、周公恐懼流言日、王莽恭謙下士時、假使當年身便死、一生真偽有誰知、諸書引者、以爲荆公之詩、臨川集不載、不知何人者也、以格律論之、亦必宋人耳、按此白樂天所作、本爲七律、茲舉其半、讀詩鑒別時代、豈容易

丞の園に過る詩に、綠は深し、裴相の野、香は滿つ、白公の山と、裴度、午橋に別墅を作る、綠野堂と號す、白樂天自ら香山居士と號す、又、故事を用ひて、痕跡無き者あり、唐子西の、殘梅詩興の晚、細草、夢魂の春、上の句は、杜詩の、東閣の官梅詩興を動すを用ひ、下の句は、靈運の池塘春草を生ずを用ふ。

程佳の獨坐の詩に云と、空館寂として人無し、撼々木葉鳴る、乍ち疑ふ風雨の聲、忽ち見る窓に當るの月と、乍忽の二字、同訓異義、此れを觀て知るべし。

唐宋の詩、風調自ら異なり、然れども、亦一概に論ずべからざるなり、郎瑛曰く、周公恐懼す流言の日、王莽恭謙下士に下るの時、假し當年身便ち死せしめば、一生の眞偽誰れ有つて知らん、諸書引く者、以て荆公の詩と爲す、臨川集に載せず、何人の者なるを知らざるなり、格律を以て之れを論ずれば、亦必ず宋人のみと、按ずるに、此れ白樂天の作る所、本と七律と爲す、茲に其の半を擧ぐ、詩を讀みて、時代を鑒別するは、豈に容易ならんや。

哉。

周密浩然齋雅談云、白傅詩、天黃生、颯母、雨
 黑長、楓人、送客遊嶺南時注云、颯母如斷虹、有大風、
 卽見、楓人因夜黑雲雨暗、長數丈、比見李仲
 寶云、往年在東平舟夜行、殘夜微月、掩篷眺
 望、忽有黑雲起、天角漸成、巨人、其長數十丈、
 棹臂濶步行水上、掠舟而西、一舟皆驚、麤群
 起視之、其去如飛、得非所謂楓人耶、按任昉
 述異記、南中有楓子鬼、楓木之老者爲人形、
 亦呼爲靈楓、白詩所稱卽此、仲寶之說、誕妄
 不足信也。

神祖命林信勝監造銅材活字、旣成、搨印群
 書治要、頒賜諸藩、實曠古盛事、清主康熙亦
 造銅材活版、然至乾隆時、銅乏、鑄之鑄錢云。

周密の浩然齋雅談に云ふ、白傅の詩に、天黃にして颯母
 を生じ、雨黒くして楓人を長ず、客を送りて嶺南に遊ぶ
 詩注に云ふ、颯母は、斷虹の如し、大風有れば卽ち見る、楓
 人は、夜黒く雲雨暗きに因りて長ずること數丈、比李仲
 寶、往年在東平に在り、舟にて夜行す、殘夜微月、篷を掩し
 て眺望するに、忽ち黑雲の天角に起るあり、漸く巨人と
 成る、其の長さ數十丈、臂を掉ひて濶歩し水上を行き、舟
 を掠めて西す、一舟皆驚、麤群起して之れを視るに、其
 の去ること飛ぶが如しと云ふを見るに、謂はゆる楓人に
 非ざるを得んや、按ずるに、任昉の述異記に、南中に楓子
 鬼あり、楓木の老ひたる者の人の形を爲す、亦呼びて靈楓
 と爲す、白の詩に稱する所卽ち此れなり、仲寶の説、誕妄
 信するに足らざるなり。

神祖、林信勝に命じて監して、銅材の活字を造らしむ、旣
 に成り、群書治要を搨印し、頒ちて諸藩に賜ふ、實に曠古
 の盛事なり、清主康熙も、亦銅材の活版を造る、然れども、
 乾隆の時に至りて、銅乏し、之を鑄して錢を鑄ると云ふ。

老子五千言中、用兮字必押韻、其餘諸子百家皆然、吾邦先儒文用兮字、或不押韻、可謂杜撰。

楊伯謙雨夜董信溪過訪詩云、臥病滄江上、柴扉晝不開、況茲風雨夕、乃有故人來、透屋吟黃葉、踈燈照綠苔、平生丘壑意、共盡掌中杯、夜雨蕭條之際、每誦此詩、以慰幽獨、但無如信溪者、深以爲憾矣。

農父作草偶人置于田間、或稱之曰案山子、余未知漢名、而西土亦有之、陸詮詩、清明日薄晝陰陰、籬外新秧短似針、轉草象人田畔立、借他風力逐飛禽、此與案山子一般、梅園日記、

李薺過廢園詩云、誰家亭院自成春、窓有葦

詩案山子事、其說確實、可從。

組雨亭隨筆卷下

老子五千言中、兮の字を用ふれば、必ず韻を押す、其餘諸子百家皆然り、吾が邦先儒の文兮の字を用ひて、或は押韻せず、杜撰と謂ふべし。

楊伯謙の雨夜に董信溪過訪の詩に云ふ、病に臥す滄江の上、柴扉晝開かず、沈んや茲れ風雨の夕、乃ち故人の來る有り、屋を透つて黃葉に吟じ、踈燈綠苔を照らす、平生丘壑の意、共に盡す掌中の杯と、夜雨蕭條の際、毎に此の詩を誦し、以て幽獨を慰む、但だ信溪の如き者無し、深く以て憾と爲す。

農父、草偶人を作り、田間に置く、或は之れを稱して案山子と曰ふ、余未だ漢名を知らず、而して西土にも亦之れ有り、陸詮の詩に、清明日薄晝陰陰、籬外の新秧短くして針に似たり、草を縛して人に象つて田畔に立つ、他の風力を借りて飛禽を逐ふと、此れ案山子と一般、梅園日記に、案山子の事を辯す、其の説確實從ふべし。

李薺の廢園を過ぐる詩に云ふ、誰が家の亭院ぞ自ら春を

苦案有塵、偏是關心鄰舍犬、隔牆猶吠折花人、第三四句、不言興廢事、反借鄰家狗兒、以及偷折花枝之人、隱然見其無主、自字著眼、春字一篇血脈。

避暑錄話婦人以姓爲稱、故周之諸女皆言姬、猶宋言子齊言姜也、自漢以來、不復辨類、以爲婦人之名、故史記言高祖居山東、好美姬、漢書外戚傳云、所幸姬戚夫人、唐姬等、皆妾而非后、則又以爲衆妾之稱、近言妾者、遂皆爲姬、事之流傳、失實每如是、令謂宗女爲姬、亦因詩言王姬之誤也、吾邦謂公侯女曰姬、其誤一轍、京俗謂妓曰姬、蓋自衆妾之稱來、失實益遠、姬音基、姓也、音怡、婦人美稱。

北魏徐遵明、與田猛略、就孫買德、受業一年、

成、窓に毒苦有り案に塵有り、偏に是れ心に關す鄰舍の犬、牆を隔て、猶吠ゆ花を折る人と、第三四句、興廢の事を言はず、反りて鄰家の狗兒を借りて、以て花枝を偷み折る人に及ぼし、隱然其の主無きを見はず、自の字著眼、春の字一篇の血脈。

避暑錄話に、婦人は姓を以て稱と爲す、故に周の諸女は、皆姬と言ふ、猶ほ宋に子と言ひ、齊に姜と言ふがごときなり、漢より以來、復た類を辨ぜず、以て婦人の名と爲す、故に史記に言ふ、高祖、山東に居りしとき、美姬を好む、漢書外戚傳に云ふ、幸する所の姬戚夫人、唐姬等、皆妾にして、而して后に非ずと、則ち又以て衆妾の稱と爲す、近こる妾を言ふ者、遂に皆姬と爲す、事の流傳して實を失ふ、毎に是くの如し、令に、宗女を謂ひて姬と爲すと、亦詩に王姬と言ふに因るの誤なり、吾が邦、公侯の女を謂ひて姬と曰ふ、其の誤り一轍なり、京俗妓を謂ひて姬と曰ふ、蓋、衆妾の稱より來る、實を失ふこと益遠し、姬は音基、姓なり、音怡、婦人の美稱。

北魏の徐遵明と田猛略と、孫買德に就きて業を受くるこ

復欲去之、猛略謂遵明曰、君年少從師、每不終業、千里負秩、何去就之甚、如此用意、終無成、遵明曰、吾今始知真師所在、猛略曰、何在、遵明乃指心曰、正在於此、余嘗讀近人經解、賦三絕句、其一云、吾道古來人所由、卻迷邪路遠相求、胸中本有真師在、一箇工夫只自修。

文人相忌自古而然、彫蟲之弊極於此矣、真學道者、自修爲要、何關世俗毀譽。

世稱皮日休爲詩人、余讀鹿門隱書、其中多格言、實爲有道君子也、隱書云、學而廢者不若不學而廢、學而廢者恃學而有驕、驕必辱、不學而廢者愧己而自卑、卑則全、勇多於人謂之暴、才多於德謂之妖、又云、文學之於人

と一年、復之れを去らんと欲す、猛略、遵明に謂ひて曰く、君年少くして師に従ひ、毎に業を終へず、千里秩を負ふ、何ぞ去就の甚しき、此くの如き用意、終に恐くは成る無けん、遵明曰く、吾今始めて真師の在る所を知れり、猛略曰く、何にか在る、遵明乃ち心を指して曰く、正在此に在りと、余、近人の經解を讀み、三絶句を賦す、其の一に云ふ、吾が道古來人の由る所、卻つて邪路に迷ふて遠く相求む、胸中本と真師の在る有り、一箇の工夫只だ自修。

文人相忌む、古よりして然り、彫蟲の弊、此に極る、真に道を學ぶ者は、自修を要と爲す、何ぞ世俗の毀譽に關せん。

世に皮日休を稱して詩人と爲す、余、鹿門隱書を讀むに、其の中に格言多し、實に有道の君子たり、隱書に云ふ、學びて而して廢する者は、學ばずして而して廢するに若かず、學びて而して廢する者は、學を恃みて而して驕ると有り、驕れば必ず辱しむ、學ばずして而して廢する者は、己を愧ぢて而して自ら卑くす、卑くすれば、則ち全し、勇の人より多きを之れを暴と謂ふ、才の德より多きを之

也。譬乎藥、善服有濟、不善服反爲害。又云、毀入者自毀之、譽人者自譽之、夫毀人者人亦毀之、不曰自毀乎、譽人者人亦譽之、不曰自譽乎、又云、嗚呼才望顯於時者殆哉、一君子愛之、百小人妬之、一愛不勝於百妬、其爲進也難、孟子與荀揚同列、漢以來皆然、請廢莊列之書、以孟子爲主、自皮日休始、唐才子傳、日休隱鹿門山、性嗜酒、癖詩、號醉吟先生、又自稱醉士、世知白居易號醉吟先生、不知日休亦有此號、故記。

焦氏筆乘引該聞錄言、皮日休陷黃巢、爲翰林學士、巡敗被誅、今唐書取其事、按尹師魯作大理寺丞、皮子良墓誌稱、曾祖日休、避廣明之難、徙籍會稽、依錢氏、官太常博士、贈禮

れを妖と謂ふ、又云ふ、文學の人に於けるや、藥に譬ふ、善く服すれば濟ふことあり、善く服せざれば反りて害を爲す、又云ふ、人を毀る者は、自ら之れを毀る、人を譽むる者は、自ら之れを譽む、夫人を毀る者は、人も亦之れを毀る、自ら毀ると曰はずや、人を譽むる者は、人も亦之れを譽む、自ら譽むると曰はずや、又云ふ、嗚呼、才の時に顯れんことを望む者は殆いかな、一君子之れを愛して、百小人之れを妬む、一愛は百妬に勝たず、其の進むを爲すや難しと、孟子は荀揚と列を同じくす、漢以來皆然り、莊列の書を廢し、孟子を以て主と爲さんと謂ふは、皮日休より始まる、唐才子傳に、日休、鹿門山に隱る、性、酒を嗜み、詩に癖なり、醉吟先生と號す、又自ら醉士と稱す、世、白居易の醉吟先生と號するを知りて、日休も亦此の號有るを知らず、故に記す。

焦氏筆乘に、該聞錄を引きて言ふ、皮日休、黃巢に陥り、翰林學士と爲る、巢敗れて誅せらる、今、唐書、此の事を取る、按ずるに、尹師魯、大理寺丞、皮子良の墓誌を作りて稱す、曾祖日休、廣明の難を避け、徙りて會稽に籍し、錢氏に依る、官は太常博士、贈禮部尙書なり、祖光業、吳越の丞相と

部尙書、祖光業爲吳越丞相、父燐爲元帥府判官、三世皆以文雄江東、據此則日休未嘗陷賊爲其翰林被誅也、光業見吳越備史、頗詳孫仲容在仁廟、時仕亦通顯、乃知小說謬妄、無所不有、師魯文章博士、且剛直有守、非欺後世者、可信不疑也、故予表而出之、爲襲美雪謗於泉下。

寤成操下、急如東、濕薪、李希烈攻、李勉於汴州、驅民運土木、築壘道以攻城、忿其未就、并人填之、謂之濕薪、慘刻百倍於寤。

吳筠山中雜詩、山際見來烟、竹中窺落日、鳥向簷上飛、雲從牕裡出、四句寫景、自是天籟、不覺際中上裡四字疊出、今人犯此、則不免詩病矣。

爲る、父燐、元帥府の判官と爲る、三世皆文を以て、江東に雄たりと、此れに據れば、則ち日休未だ嘗て賊に陥りて、其の翰林と爲りて誅せられざるなり、光業は、吳越備史に見ゆ、頗る詳なり、孫仲容、仁廟の時に在りて、仕へて亦通顯、乃ち知る、小説謬妄、有らざる所無きを、師魯は、文章博士にして、且つ剛直にして守あり、後世を欺く者に非ず、信す可くして疑はざるなり、故に予表して之れを出だし、襲美の爲に、謗を泉下に雪ぐ。

寤成、下を操ること急にして、濕薪を束ぬるが如し、李希烈、李勉を汴州に攻む、民を驅りて土木を運び、壘道を築き、以て城を攻む、其の未だ就らざるを忿りて、人を并せて之れを填む、之れを濕薪と謂ふ、慘刻なること寤に百倍す。

吳筠の山中雜詩に、山際來烟を見る、竹中落日を窺ふ、鳥は簷上に向つて飛び、雲は牕裡從り出づ、四句、景を寫す、自らは是れ天籟、際中、上裡の四字疊出するを覺えず、今人此れを犯さば、則ち詩病を免れず。

潯陽三隱、竹溪六逸考之本史、竝無其傳。三隱見梁昭明撰淵明傳、陶潛周嶺之鄒遺民、然其時代不同、先儒辨之、六逸出南部新書、李白孔巢父韓準、裴政張叔明陶沔、徐興公曰、宋宇種菜三十品、雨後按行園圃、曰、天苗此徒助余鼎俎、周顒曰、春初早韭、秋末晚菘、王維詩云、林下清齋折露葵、三君皆得農圃風味、此況未可、肉食肥漢道也、按東坡有擬菜詩云、吾借王參軍地種菜不及半畝、而吾與過子終年飽菜、夜半飲醉、無以解酒、輒擬菜煮之、味含土膏、氣飽風露、雖聚肉不能及也、人生須底物、而更貪耶、乃作四句、秋來霜露滿東園、蘆葍生兒芥有孫、我與何曾同一飽、不知何苦食鷄豚、農圃風味盡於此矣、余性嗜菜、過於魚肉、然宅無隙地、不

潯陽の三隱、竹溪の六逸、之れを本史に考ふるに、竝に其の傳無し、三隱は梁の昭明の撰する淵明の傳に見ゆ、陶潛周嶺之鄒遺民、然れども、其の時代同じからず、先儒之れを辨ぜり、六逸は、南部新書に出づ、李白、孔巢父、韓準、裴政、張叔明、陶沔、徐興公曰く、宋宇、菜三十品を種う、雨後、園圃を按行す、曰く、天、此の徒を苗して、余の鼎俎を助くと、周顒曰く、春初の早韭、秋末の晚菘と、王維の詩に云ふ、林下清齋露葵を折ると、三君、皆農圃の風味を得たり、此れ況んや未だ肉食の肥漢と道ふべからざるなり、按ずるに、東坡、菜を種する詩あり、云ふ、吾れ王參軍の地を借りて、菜を種う、半畝に及ばず、而して吾れ過子と、終年菜に飽く、夜半飲醉、以て酒を解する無し、輒ち菜を擲して之れを煮る、味、土膏を含み、氣、風露に飽く、梁肉と雖ども、及ぶ能はざるなり、人生底物を須むて更に食らんや、乃ち四句を作る、秋來霜露東園に滿つ、蘆葍兒を生じ芥に孫有り、我れ何曾と同じく一飽す、知らず何にを苦んで鷄豚を食はん」と、農圃の風味、此に盡きたり、余性菜を嗜む、魚肉よりも過ぎたり、然れども、宅に隙地無し、之れを種うる能はず、黒瀬通村の農夫、余と親しき者、冬より春に至り、各相寄贈す、以て飽食するを得たり、此の二村の種、風味甚だ美な

能種之、黑潮通村農夫、與余親者、自冬至、春、各相寄贈、得以飽食、此二村之種、風味甚美、但恨身在市中、不得菜圃之趣也、眞悅題、菜云三日宿醒醒不得、正思風味、到辛盤、能盡酒客之情。

香祖筆記、范傳正作李翰林墓碑云、與賀監、汝陽王、崔宗之、裴周南等八人、爲酒中八仙、周南之名、杜飲中八仙歌無之、唐書白本傳所載、八仙人亦與杜詩同、按、困學紀聞云、飲中八仙、其名氏皆見於唐史、唯焦遂事蹟、僅見於甘澤謠、是竝可補杜詩注。

宋書禮志、指南車、其始周公所作、以送荒外遠使、晉代又有指南舟、其製不詳。

赤雅、貴少賤老、染髮剃鬚、喜作羅漢、羅漢者

り、但だ恨む身は市中に在りて、菜圃の趣を得ざるを、眞悦、菜に題して云ふ、三日宿醒醒し得ず、正に思ふ風味の辛盤に至るを、能く酒客の情を盡せり。

香祖筆記に、范傳正、李翰林の墓碑を作りて云ふ、賀監、汝陽王、崔宗之、裴周南等八人と、酒中の八仙と爲す、周南の名、杜の飲中八仙歌に之れ無し、唐書の白の本傳に載する所の八仙人も亦杜の詩と同じ、按ずるに、困學紀聞に云ふ、飲中の八仙、其名氏皆唐史に見ゆ、唯だ焦遂の事蹟、僅に甘澤謠に見ゆと、是れ竝に杜詩の注を補ふべし。

宋書の禮志に、指南車は、其の始め周公の作る所、以て荒外の遠使を送る、晉代、又指南舟あり、其の製詳ならず。

赤雅に、少を貴びて老を賤み、髮を染め鬚を剃り、喜みて

惡少之稱、吾鄉稱無賴之徒曰羅漢、亦似暗合。

魏主珪問博士李先曰、天下何物最善、可以益人神智、對曰莫若書籍、余相識中、有好讀書者、不見其益、神智之功、蓋誦其言、而不能解其意也。

吾鄉寒暑之節、親戚朋友互相問訊、且贈時物、不堪煩冗、或如循環有再歸者、豹隱紀談云、吳門風俗多重、至節謂曰肥冬瘦年、互送節物、寓官顏侍郎度有詩曰、至節家家講物儀、迎來迎去費心機、脚錢盡處渾閒事、原物多時卻再歸、虛禮之煩、和漢同弊。

子曰、始吾於人也、聽其言而信其行、今吾於人也、聽其言而觀其行、余亦讀詩想其爲人、

羅漢と作ると、羅漢とは、惡少の稱、吾が郷、無賴の徒を稱して羅漢と曰ふも、亦暗合に似たり。

魏主珪、博士李先に問ふて曰く、天下何物か最も善く以て人の神智を益すべき、對へて曰く、書籍に若くは莫しと、余の相識中に、好みて書を読む者有り、其の神智を益すの功を見ず、蓋其の言を誦して、而して其の意を解すること能はざればなり。

吾が郷、寒暑の節、親戚朋友、互に相ひ問訊す、且つ時物を贈る、煩冗に堪へず、或は循環の如く、再び歸る者あり、豹隱紀談に云ふ、吳門の風俗、多く至節を重んず、謂ひて肥冬瘦年と曰ふ、互に節物を送る、寓官顏侍郎度、詩有り曰く、至節家家物儀を講ず、迎へ來り迎へ去つて心機を費す、脚錢盡る處渾て閒事、原物多時卻つて再び歸ると、虚禮の煩なる、和漢同弊。

子曰く、始め吾が人に於けるや、其の言を聽きて而して其の行を信ず、今、吾が人に於けるや、其の言を聽きて而して其の行を觀る、余も亦詩を讀みて、其の人と爲りを

言行相反、有如冰炭、詩人之言不可盡信、元遺山詩云、心畫心聲、總失、眞文章、寧復見爲人、高情千古、閑居賦、爭信安仁拜路塵。

梁武帝詩、一年漏將盡、萬里人未歸、唐戴叔倫詩、一年將盡、夜萬里未歸、人青出於藍、杜子美露從今夜白、月是故鄉明、僧文益、髮從今日白、花是去年紅、鎔金成鐵。

虞詡日夜兼行百餘里、令吏士各作兩籠、日增倍之、羌不敢逼、或問曰、孫臏滅竈、而君增之、兵法日行不過三十里、以戒不虞、而今日且二百里、何也、詡曰、孫臏見弱、吾今示強、勢有不同也、余謂、詡善活用孫子之法、卽與淮陰侯背水同意、膠柱鼓瑟、不敗者少、觀田單後用火牛者、可知矣。

鍾雨亭隨筆卷下

想ふに、言行相反し、冰炭の如き有り、詩人の言、盡く信すべからず、元遺山の詩に云ふ、心畫心聲、總て眞を失ふ、文章寧ぞ復た人と爲りを見ん、高情千古閑居の賦、争か信ぜんや安仁の路塵を拜するを。

梁の武帝の詩に、一年漏將に盡きんとす、萬里人未だ歸らずと、唐の戴叔倫の詩に、一年將に盡きんとするの夜、萬里未だ歸らざるの人と、黃、監より出づ、杜子美の「露は今夜従り白く、月は是れ故郷に明かなり、僧文益の「髮は今日従り白く、花は是れ去年の紅」と金を鎔して鐵と成せり。

虞詡、日夜兼行百餘里、吏士をして、各兩籠を作らしめ、日に之れを増倍す、羌敢て逼らず、或問ひて曰く、孫臏は竈を滅す、而るに君之れを増す、兵法に、日に行くこと、三十里に過ぎず、以て不虞を戒む、而るに今日且に二百里ならんとするは何ぞや、詡曰く、孫臏は弱を見ず、吾は今強を示す、勢、同じからざる有ればなりと、余謂ふ、詡善く孫子の法を活用す、卽ち淮陰侯の背水と同意なり、柱に膠して瑟を鼓す、敗れざる者は少し、田單の後、火牛を用ふる者を觀て、知るべし。

唐書高險傳、初太宗嘗以山東士人尙閭閻、後雖衰猶負世望、嫁娶多取貨、故人謂之賣婚、吾鄉望族近來多有賣婚之弊、尙且誇其門地、何顏之厚也。

南蠻傳、訶陵有毒女、與接輒苦瘡、按毒女即有癰氣者、當時傳染不多、人以爲奇耳、或云古無癰瘡、及明中葉起於嶺南之地、是未深考之誤、千金陰頭癰、外臺陰頭生瘡、皆指癰瘡言也。

許胤宗、唐名醫也、或勸其著書貽後世者、答曰、醫意耳、思慮精則得之、脈之候幽而難明、吾意所解不能宣也、虛著方劑無益於世、此吾所以不著書也、余觀近時醫書、漢蘭湊合、不過紙上空談、胤宗之言可謂確實矣、元葛

唐書高險傳に、初め太宗嘗て山東の士人を以て、閭閻を尙ぶ、後衰ふと雖ども、猶世望を負ふ、嫁娶多く貨を取る、人之れを賣婚と謂ふ、吾が郷の望族、近來多く賣婚の弊あり、尙且つ其の門地を誇る、何ぞ顏の厚きや。

南蠻傳に、訶陵に毒女あり、與に接すれば、輒ち瘡を苦しむと、按するに、毒女は即ち癰氣ある者なり、當時傳染多からず、人以て奇と爲すのみ、或ひと云ふ、古癰瘡無し、明の中葉に及びて、嶺南の地に起ると、是れ未だ深く考へざるの誤、千金に、陰頭の癰、外臺に、陰頭に瘡を生ずと皆癰瘡を指して言ふなり。

許胤宗は、唐の名醫なり、或ひと其の書を著して後世に貽さんことを勸むる者あり、答へて曰く、醫は意のみ思慮精なれば則ち之れを得、脈の候幽にして而して明なり難し、吾が意の解する所、宜ぶること能はざるなり、虚く方劑を著すも、世に益無し、此れ吾が書を著さざる所により、余近時の醫書を觀るに、漢蘭湊合、紙上の空談に過ぎず、胤宗の言確實と謂ふべし、元の葛恆齋曰く、醫

恆齋曰、醫當視時之盛衰爲損益、劉守眞張子和值金人強盛、民俾氣剛、故多用宣洩之法、及其衰也、兵革之餘、飢饉相仍、民勞志困、故張潔古李明之輩多加補益、至宋之季、大抵務守護元氣而已、本邦昇平三百年、飽食逸居之徒、多患積痛、凡爲醫者、不可不思。

張嘉貞曰、近世士大夫、務廣田宅、爲不肖子酒色費、我無是也、吾邑守錢虜、爲子孫多買山林田園、反爲其酒食費者、往往有之。

凡憩村亭野店者、吹烟或喫茶、臨去留錢少許、俗曰茶料、常稱茶湯錢、司馬溫公置獨樂園、春際草木秀茂、許人往觀、游人以錢與園丁、呂直謂之茶湯錢、卽茶料之類也。

唐書徐商傳、券紙爲鏡、勁矢不能洞、按宋康

は當に時の盛衰を視て、損益を爲すべし、劉守眞張子和、金人の強盛に値ふ、民俾にして氣剛なり、故に多く宣洩の法を用ふ、其の衰ふるに及びては、兵革の餘、飢饉相仍る、民勞し志困した、故に張潔古李明の輩、多く補益を加ふ、宋の季に至りては、大抵務めて元氣を守護するのみと、本邦昇平三百年、飽食逸居の徒、多く積痛を患ふ、凡そ醫たる者、思はざるべからず。

張嘉貞曰く、近世の士大夫、務めて田宅を廣め、不肖子の酒色の費と爲す、我は是れ無きなり、吾が邑の守錢虜、子孫の爲に、多く山林田園を買ふ、反つて其の酒色の費と爲す者、往々之れ有り。

凡そ村亭野店に憩ふ者、烟を吹き或は茶を喫す、去るに臨みて錢を留むること少許、俗に茶料と曰ふ、當に茶湯錢と稱すべし、司馬溫公、獨樂園を置く、春際、草木秀茂、人の往きて觀るを許す、游人錢を以て園丁に與ふ、呂直之れを茶湯錢と謂ふ、卽ち茶料の類なり。

唐書徐商傳に、紙を券きて鏡を爲る、勁矢も洞くこと能

定四年、説江淮淮南、造紙甲三萬、給陝西、蓋倣商法也、紙鎧漆塗、堅不滅革、或云不能禦銃丸、其製據劈紙二字、則如俗間所稱陣笠之法。

鮑明遠詩、歸花先委露、別葉早辭風、李善注、花落向本、故曰歸花、葉下離枝、故云別葉、余謂此句入宋人集中、不可復辨。

曹植盤石篇云、乘桴何所志、吁嗟我孔公、稱夫子曰孔公、絕奇。

詩人輕和歌、歌人亦仇視之、彼此俱非、至其妙悟、詩歌一致、藤原爲家嘗誨人曰、凡作和歌、如渡危橋、不可左右回顧、又曰、譬之作五重塔、始自基址、當留心下句、作詩之法、亦不出此範圍矣、藤原俊成曰、歌之佳處、在得大

はずと、按ずるに、宋の康定四年、江淮淮南に詔して、紙甲三萬を造りて、陝西に給す、蓋商の法に倣ふなり、紙鎧、漆もて塗る、堅きこと革に滅ぜず、或は云ふ銃丸を禦ぐこと能はずと、其の製紙を劈くの二字に據れば、則ち俗間に稱する所の陣笠の法の如し。

鮑明遠の詩に、歸花先づ露に委し、別葉早く風を辭すと、李善の注に、花落ちて本に向ふ、故に歸花と曰ふ、葉下りて枝を離る、故に別葉と云ふ、余謂ふ、此の句、宋人の集中に入るゝも、復辨すべからず。

曹植の盤石篇に云ふ、桴に乘ず何の志す所ぞ、吁嗟我が孔公と、夫子を稱して孔公と曰ふ、絶奇なり。

詩人、和歌を輕んず、歌人も亦之れを仇視す、彼此俱に非なり、其の妙悟に至りては、詩歌一致、藤原爲家嘗て人に誨へて曰く、凡そ和歌を作るは、危橋を渡るが如し、左右に回顧すべからず、又曰く、之れを五重の塔を作るに譬ふに、基址より始る、當に心を下句に留むべしと、詩を作るの法、亦此の範圍に出でず、藤原俊成曰く、歌の佳處は、大體を得るに在るのみ、務めて彫刻組織を爲すべから

體而已、不可務爲彫刻組織也、譬諸畫工圖物、倘徒事丹青欄絢、則反使人可厭矣、要自然而有味、是爲得之也、此語近世詩人頂門一針。

余在浪華、一日米薪俱盡、囊無一錢、僑居日淺、無所假貸、自謂坐而忍飢、不如臥而忘之、就枕而睡、及覺枕上有炒麥粉一包、不知所自、問之鄰人曰、嚮有扞厠夫、嚮小便去、蓋其所對易云、乞茶喫之、得以一飽、是夕街上吹笛、按摩數人、獲百餘錢、實余少年客中第一厄也。

孟子性善之說、其所歸者仁也、釋氏一切衆生皆有佛性、其所歸者慈悲也、其言雖異、其致則一、廣弘明集、何太史報應問、余謂佛經但是假設權教、勸人爲善耳。

す、諸れを畫工の物を圖するに譬ふに、倘し徒に丹青欄絢を事とすれば、則ち反りて人をして厭ふべからしむ、要するに、自然にして味ある、是れ之れを得たりと爲すなりと、此の語、近世詩人の頂門の一針。

余、浪華に在り、一日、米薪俱に盡く、囊に一錢無し、僑居日淺く、假貸する所無し、自ら謂ふ、坐して飢を忍ぶは、臥して而して之れを忘るゝに如かずと、枕に就き而して睡る、覺むるに及びて、枕上に炒麥粉一包有り、自る所を知らず、之れを鄰人に問ふ曰く、嚮に扞厠夫あり、小便を擔ひて去る、蓋、其の對易する所と云ふ、茶を乞ひて之れを喫す、以て一飽するを得たり、是の夕、街上、笛を吹き、數人を按摩し、百餘錢を獲たり、實に余が少年客中の第一厄なり。

孟子の性善の說、其の歸する所は仁なり、釋氏は一切衆生、皆佛性有り、其の歸する所は慈悲なり、其の言異なりと雖ども、其の致は則ち一なり、廣弘明集に、何太史報應問、余謂ふ、佛經は但だ是れ假設の權教、人を勸めて善を爲さしむるのみ。

荀孟言性其言相反、要其導人爲善一也、然不及孟子至當也、性謂之善、則人人能長、其善可以到聖賢之域矣、性謂之惡、則人人務去其惡、是亦可以到聖賢之域矣、但荀以道爲假、故其弊不可勝言也、公孫子曰、性無善惡、揚雄曰、性善惡渾、二子不知、孟荀立言之旨、以吾見聞所及、爲此含糊之說、其言似精實麤。

阮元仁說一卷、博舉衆說、然未盡其義也、按六書精蘊、元天地之大德、所以生生者也、元字从二从人、仁字从人从二、在天爲元、在人爲仁、在人身則爲體之長、故元居四德之始、仁在五常之上、說文集解象形兩儀爲二、又中相離爲天地、象故亟仁等字从之、蓋仁

荀孟の性を言ふ、其の言相反す、要するに、其の人を導きて善を爲さしむるは一なり、然れども、孟子の至當なるに及ばざるなり、性之れを善と謂ふ、則ち人々能く其の善を長じて、以て聖賢の域に到るべし、性之れを惡と謂ふ、則ち人々務めて其の惡を去る、是れ亦以て聖賢の域に到るべし、但だ荀は道を以て假と爲す、故に其の弊勝けて言ふべからず、公孫子曰く、性に善惡無しと、揚雄曰く、性は善惡渾すと、二子、孟荀言を立つるの旨を知らず、吾が見聞の及ぶ所を以て、此の含糊の説を爲す、其の言精に似て實は麤なり。

阮元の仁の説一卷、博く衆説を擧ぐ、然れども、未だ其の義を盡さざるなり、按するに、六書精蘊に、元は天地の大徳、生生する所以の者なり、元の字、二に从ひ人に从ふ、仁の字、人に从ひ二に从ふ、天に在りては元と爲し、人に在りては仁と爲す、人の身に在れば、則ち體の長たり、故に元は四徳の始に居る、仁は五常の上に在り、說文集解に、象形、兩儀を二と爲す、又中相離る、天地の象と爲す、故に亟仁等の字は之れに从ふ、蓋仁は、天地生々の理、人心に

者、天地生生之理存乎人心也。禮運云、人者天地之心也。孟子曰、仁人心也。人而不仁、則天地之心不立矣。爲天地立心、仁也。凡人生而受天地之心、謂之性、卽仁是也。中庸云、天之命之謂性。孟子曰、性善、皆自天理上說著。性善卽仁之根本也。朱子曰、桃仁李核種著便生、不是死物、所以名之曰仁。上蔡謝氏以爲活者爲仁、死者爲不仁、是以生意論仁得之矣。余謂衆果之核皆有生意、故名曰仁、桃杏郁李之類是已。人身麻痺謂之不仁、以其無生意也。上蔡死活之說、蓋亦此意。

吾鄉永野氏藏南北略、此書漢人所寫、中有缺本、邦人補之、余借而讀之。滿清革命之際、多以直筆記之、以觸忌諱、不載姓名、全部五百餘篇、自忠肝義

存するなり。禮運に云ふ、人とは天地の心なり。孟子曰く、仁は人心なり。人にして而して仁ならざれば、則ち天地の心立たず。天地の爲に心を立つるは仁なり。凡そ人生れて而して天地の心を受く、之れを性と謂ふ、卽ち仁是れなり。中庸に云ふ、天の命するを之れ性と謂ふと、孟子曰く、性は善と、皆天理の上より說著す。性善は卽ち仁の根本なり。朱子曰く、桃仁李核種著せば便ち生ず、是れ死物ならず、之れを名づけて仁と曰ふ所以なりと、上蔡謝氏以爲らく、活者を仁と爲し、死者を不仁と爲す、是生意を以て、仁を論ずるは、之れを得たり。余謂ふ、衆果の核、皆生意あり、故に名づけて仁と曰ふ。桃杏郁李の類、是れのみ、人身の麻痺する、之れを不仁と謂ふ、其の生意無きを以てなり。上蔡死活の說、蓋亦此の意。

吾が郷の永野氏、南北略を藏す、此の書漢人の寫す所、缺本にあり、邦人之れを補ふ、余借りて而して之れを讀む。滿清革命の際、多く直筆を以て之れを記す、忌諱に觸るゝを以て、姓名を載せず、全部五百餘篇、忠肝義膽より

讀出此書漢土決無刻本、又不許存于世、余抄其跋並紀事誌感讀書者三篇、以標作者苦心。

跋云、甚矣書之不易成也、昔之著書者、必有三資、四助、三資者、才學識是、落筆驚人、才也、博極群書、學也、論斷千古、識也、四助、維何、一曰勢、倚藉聖賢、二曰力、所須隨致、三曰友、參訂折衷、四曰時、神旺心開、予也賦資頑魯、眇見寡聞、壁立如渴司馬、數奇若飛將軍、孤憤窮愁、過韓公子魏虞卿、七者無一、而欲握管綴辭、不幾爲識者所笑乎、雖然、竊有志者焉、康熙午未申酉之際、作南北略兩書、共草五百餘篇、予以右目新蒙、兼有久視生花之病、尙未騰真、及庚戌二月六日甲子、額天誓成、

出づ、此の書漢土には決して刻本無し、又世に存することを許さず、余、其の跋並に紀事誌感讀書者の三篇を抄して、以て作者の苦心を標す。

跋に云ふ、甚しきかな、書の成し易からざるや、昔の書を著す者は、必ず三資四助あり、三資とは、才學識是れなり、落筆人を驚すは才なり、博く群書を極むるは學なり、千古を論斷するは識なり、四助とは維れ何ぞ、一に曰く、勢、聖賢に倚藉す、二に曰く、力、須ふる所隨ひて致す、三に曰く、友、參訂折衷す、四に曰く、時、神旺に心開く、予や賦資頑魯、眇見寡聞、壁立、渴司馬の如く、數奇、飛將軍の若し、孤憤窮愁、韓の公子、魏の虞卿に過ぎたり、七の者一無く、而して管を握り辭を綴らんと欲す、幾んど識者に笑はれざらんや、然りと雖ども、竊に志す者有り、康熙午未申酉の際、南北畧兩書を作る、共に五百餘篇を草す、予、右目新に蒙し、兼ねて、久視生花を生ずるの病あるを以て、尙未だ真に騰せず、庚戌二月六日甲子に及びて、天に額し成を

靜書數日、銀海烟然、隙月家表弟胡子鴻儀
 殊解人意、邀坐采舞榭中、示以秘笈、贈以管
 城、予遂縱覽、凝思、目不交睫、手不停批、晨夕
 弗輟、寒暑無間、賓朋出入弗知、家鄉鹽米弗
 問、肆力期年、得書千紙、辛亥春、正復入城、披
 錄、元夕后、忽友人薦予社埵王氏、攜篋赴館、
 枕上鳥聲、案前山色、消受愧多、予方喜、門牘
 清簡、編書有暇、不謂春甫半疾患頓生、坐臥
 彌月、殊覺悶悶、孟夏既望、北略始竣、五月十
 五、甲午復書南略、計日課篇、十一月十三爲
 二親窳窳、停筆三旬、迨季冬六日癸未、乃成、
 北略三十一萬一千三十餘言、南略廿四萬
 四千三百餘言、共計五十五萬五千三百餘
 言、予以編書不易、故誌其始末如此、辛亥季

著、靜書數日、銀海烟然、月を踰えて、家表弟胡子鴻儀、殊
 に入意を解し、邀へて采舞榭中に坐せしめ、示すに秘笈
 を以てし、贈るに管城を以てす、予遂に縱覽、思を凝し、目
 睫を交へず、手、批するを停めず、晨夕輟まず、寒暑無く、
 賓朋の出入も知らず、家郷の鹽米も問はず、力を肆にす
 ること期年にして、書千紙を得たり、辛亥の春、正に復た
 城に入りて披録す、元夕の後、忽ち友人、予を社埵王氏に
 薦む、篋を携へて館に赴く、枕上の鳥聲、案前の山色、消受
 多きを愧づ、予方に門牘清簡にして、編書暇有るを喜ぶ、
 春甫半ば疾患頓に生ずるを謂はず、坐臥月を彌る、殊に
 悶々を覺ゆ、孟夏既望、北畧始めて竣る、五月十五甲午、復
 た南略を書す、日を計へ篇を課し、十一月十三、二親の窳
 窳の爲に、筆を停むること三旬、季冬六日癸未に迨びて、
 乃ち成る、北畧三十一萬一千三十餘言、南畧廿四萬四千
 三百餘言、共に計五十五萬五千三百餘言、予、書を編する
 易からざるを以て、故に其の始末を誌すこと此くの如
 し、辛亥季冬九日、王館に書す。

冬九日王館書

紀事云、庚戌季冬二日、嚴寒饑民一夕凍死四十七人、未幾大雪連旬、數尺千里、予呵筆疾書、未嘗少廢、辛亥季夏酷暑、各方死者日聞、予雖汗流浹背、必限錄五紙、每晨起、用手巾六層陳案上、書畢視之、肘下透洽。

誌感云、予輯南北略、既成、興歎曰、嗟乎集書之難也、如此哉、予綴草四載、謄次二年、始得造竣、未審當世有知我者否、因憶劉歆視揚子太玄法言、謂之曰、空自苦、吾恐后人用覆罇瓶也、王邑嚴尤謂桓譚曰、子嘗稱揚雄書豈能傳于后世乎、譚曰、必傳、願君與譚不及見也、凡人賤近而貴遠、親見揚子雲祿位容貌不足勸人也、輕其書耳、左思貌癯、十年製

紀事に云ふ、庚戌の季冬二日、嚴寒饑民一夕凍死するもの四十七人、未だ幾ならず、大雪旬に連り、數尺千里、予、筆を呵して疾書す、未だ嘗て少しも廢せず、辛亥の季夏、酷暑、各方死する者日に聞ゆ、予、汗流背に澆しと雖ども、必ず限りて五紙を録す、晨に起くる毎に、手巾六層を用ひて案上に陳し、書し畢りて之れを視れば、肘下透洽す。

誌感に云ふ、予、南北畧を輯し、既に成る、歎を興して曰く、嗟乎、集書の難きや、此くの如きかな、予、草を綴ること四載、謄次二年、始めて造竣を得たり、未だ當世我を知る者有りや否やを審にせず、因りて憶ふ、劉歆、揚子の太玄法言を視て、之れに謂ひて曰く、空しく自ら苦む、吾れ恐くは後人の用ひて罇瓶を覆はんことをと、王邑、嚴尤、桓譚に謂ひて曰く、子、嘗て揚雄の書を稱すれど、豈に能く後世に傳はらんや、譚曰く、必ず傳はらん、願ふに、君と譚とは、見るに及ばざらん、凡そ人は近きを賤みて而して遠きを貴ぶ、親しく揚子雲の祿位容貌、人を動かすに足らざるを見て、其の書を輕んずるのみと、左思、貌癯なり、十

賦、陸機笑之、及玄晏爲序、紙貴洛陽、名勢惡薄、今古同悲、予身居賤末、無子雲太沖之才、必多劉歆陸機之誚、嗟乎、不附青雲之士、焉能聲施后世乎、故感而誌之。

讀書者云、不知我者、不可讀我書、卽知我未深者、不可讀我書、不知書者、不可讀我書、卽知書未深者、亦不可讀我書、無緣分者、不能讀我書、卽緣分猶淺者、亦不能讀我書、無福分者、不能讀我書、卽福分猶淺者、亦不能讀我書、噫嘻茫茫、求其可讀我書、能讀我書者、豈无其人、雖然、又誰是其人也、辛亥季冬十四日、天節子識、按辛亥卽康熙十年、當吾寬文十一年也。

茶餘客話云、康熙御製詩、御史有以沙汰僧

年賦を製す、陸機之れを笑ふ、玄晏が序を爲るに及びて、紙洛陽に貴し、名勢惡薄、今古悲を同じくす、予、身賤末に居り、子雲、太沖の才無し、必ず劉歆、陸機の誚多からん、嗟乎、青雲の士に附くにあらざれば、焉ぞ能く聲後世に施さんや、故に感じて之れを誌す。

讀書者に云ふ、我れを知らざる者は、我が書を讀む可からず、卽ち我れを知ること未だ深からざる者は、我が書を讀む可からず、書を知らざる者は、我が書を讀む可からず、卽ち書を知ること未だ深からざる者も、亦我が書を讀む可からず、緣分无き者は、我が書を讀むこと能はず、福分无き者は、我が書を讀むこと能はず、卽ち福分猶淺き者も、亦我が書を讀むこと能はず、噫嘻茫茫たり、其の我が書を讀むべきと、能く我が書を讀む者とを求むるに、豈に其の人无からんや、然りと雖ども、又誰か是れ其の人ならんか、辛亥季冬十四日、天節子識、按するに、辛亥は卽ち康熙十年、吾が寬文十一年に當れり。

茶餘客話に云ふ、康熙御製の詩、御史僧道を沙汰するを

道爲請者、朕謂沙汰何難、卽盡去之、不過一紙之頒天下、有不奉行者乎、但今之僧道、寔不比昔日之橫恣、有賴于儒氏辭而闕之、蓋彼教已式微矣、且籍以養流民、分田授井之制、既不可行、將此數千百萬無衣無食遊手好閒之人、置之何處、故爲詩以見意云、頽波日下豈能廻、二氏于今亦可哀、何必關邪猶泥古、留資畫景與詩材、真大哉王言也、方今二氏之教、不足以惑世誣民、法苑珠林、聊供詩人藻績耳、余謂、白面書生、受先儒唾餘、好排釋氏、不免泥古之弊、陳繼儒論佛極穩、可謂通儒矣、論云、佛氏者朝廷之大養濟院也、我明設養濟院、以養無告也、然州縣不過三百、疲癯殘疾止矣、其外少壯而貧、終身不能

以て請ふを爲す者あり、朕謂ふ沙汰何ぞ難からん、卽ち盡く之れを去るには一紙の天下に頒つに過ぎず、奉行せざる者有らんや、但だ今の僧道は、寔に昔日の横恣に比せず、儒氏の辭して而して之れを闕くに頼る有り、蓋彼の教已に式微せり、且つ籍りて以て流民を養はん、田を分ち井を授くるの制、既に行ふべからず、此の數千百萬無衣無食遊手好閒の人を將つて、之れを何の處にか置かんや、故に詩を爲りて以て意を見はすと云ふ、頽波日に下る豈に能く廻さんや、二氏今に于いて亦哀む可し、何ぞ必ずしも邪を闕く猶古に泥まん、留めて畫景と詩材とに資せん、と、真に大なるかな王の言や、方今二氏の教、以て世を惑し民を誣るに足らず、法苑珠林は、聊か詩人の藻績に供するのみ、余謂ふ、白面の書生、先儒の唾餘を受け、好みて釋氏を排す、古に泥むの弊を免れず、陳繼儒佛を論する極めて穩なり、通儒と謂ふべし、論に云ふ、佛氏は、朝廷の大養濟院なり、我が明、養濟院を設けて以て無告を養ふなり、然るに、州縣三百に過ぎず、疲癯殘疾のみ、其の外、少壯にして而して貧、身を終るまで、瀧鮑婚娶する、と、能はざる者、幾千萬人なるを知らず、幸に佛教の一門、此の輩を收拾するのみ、夫れ今の僧は、真に父母を離れ、

温飽婚娶者、不知幾千萬人、幸佛教一門收、
 拾此輩耳、夫今之僧、非眞忍於離父母去妻
 子、叛名教而思以易天下也、大都貧賤無聊、
 計無復之、眞所謂天下之窮民而無告者、既
 代王者養、此窮漢、又代王者教、此窮漢、蓋佛
 教得力處、正朝廷省力處也、袁子才答汪大
 紳書、亦極有見解、書云、常謂佞佛者愚、闢佛
 者迂、僕非迂儒也、平時不佞佛、亦不闢佛、以
 爲佛者九流之一家、周官閑民之一種、聖人
 復起不廢九流、亦不廢佛、至於人之好尙、各
 有所癖、好佛者亦猶好奕好鐵好結髦之類、
 所謂小是、不必是、小非、不必非、友朋不爭以
 全交也、乃書來強僕亦從事于斯、不得不辯、
 客話云、陸稼書曾祖溥爲豐城縣丞、嘗督運

組雨亭隨筆卷下

妻子而去、名教に叛くに忍びて、而して以て天下を易
 へんことを思ふには非ざるなり、大都貧賤無聊、計るに
 之れを復する無し、眞に謂はゆる天下の窮民にして告ぐ
 る無き者、既に王者に代りて、此の窮漢を養ふ、又王者に
 代りて、此の窮漢を教ふ、蓋佛教力を得る處は、正に朝廷
 力を省く處なりと、袁子才の汪大紳に答ふる書も、亦極
 めて見解有り、書に云ふ常に謂ふ、佛に佞する者は愚、佛
 を闢く者は迂、僕は迂儒に非ざるなり、平時、佛に佞せず、
 亦佛を闢かず、以爲へらく、佛は九流の一家、周官閑民の
 一種、聖人復起るとも、九流を廢せず、亦佛を廢せず、人の
 好尙に至りては、各癖する所有り、佛を好む者は、亦猶奕
 を好み、鍛を好み、結髦を好むの類のごとし、謂はゆる小
 是必ずしも是ならず、小非必ずしも非ならず、友朋争はずして
 以て交を全うするなり、乃ち書來りて僕に強ふる
 も、亦斯に従事せん辯せざるを得ず。

客話に云ふ、陸稼書が曾祖溥、豐城縣の丞と爲り、嘗て運

夜過采石、舟漏、跪曰、舟中一錢、非法、願葬魚腹、漏忽止、且視之、則水荇裏三魚塞其罅、人稱爲盛德之祐、溥子東遷居泖上、築堂名三魚、今稼書文集稱三魚堂、余聞一商舟渡東洋、舟漏、祈青峯觀世音、已而漏止、入港、視之二鯢、窺隙、舟師登青峯以謝、冥助云、門人益叔亮、爲之記、刻于石、蓋舟師亦有陰德者。

水經注、風俗通曰、俗說高祖與項羽戰於京索、遁於薄中、羽追求之、時鳩止鳴其上、追之者以爲必無人、遂得脫、按源賴朝石橋山之敗、竄伏樹窟中、大庭景親以弓探之、二鳩飛出、創業之主、鬼神助之、所謂天授、非人力也。

初學之徒、做詩、惟要佳句、不顧章法、故通篇亂雜、意不貫通、潘次耕廣武詩、善備起承轉

を管す、夜、采石を過ぐ、舟漏る、跪きて曰く、舟中一錢も法に非ずんば、願くば魚腹に葬らんと、漏忽ち止む、且に之れを視れば、則ち水荇にて三魚を塞み、其の罅を塞ぎたり、人稱して盛德の祐と爲す、溥の子東、居を泖上に遷す、堂を築きて三魚と名づく、今、稼書文集を三魚堂と稱す、余聞く、一商舟東洋を渡る、舟漏る、青峯の觀世音に祈る、已にして漏止む、港に入りて之れを視れば、二鯢隙を窺く、舟師青峯に登り、以て冥助を謝すと云ふと、門人益叔亮、之れが記を爲りて石に刻す、蓋舟師も亦陰德あるものならん。

水經注に、風俗通に曰く、俗説に、高祖、項羽と京索に戦ひて、薄中に遁る、羽追ひて之れを求む、時に鳩止りて其上に鳴く、之れを追ふ者、以て必ず人無しと爲す、遂に脱することを得たりと、按ずるに、源賴朝の石橋山に敗るや、樹窟中に竄伏す、大庭景親弓を以て之れを探る、二鳩飛び出づと、創業の主、鬼神之れを助く、謂はゆる天授にして、人力に非ざるものなり。

初學の徒、詩を做す、惟だ佳句を要して、章法を顧みず、故に通篇亂雜、意貫通せず、潘次耕の廣武の詩、善く起承轉

合之法、一見易了、今爲初學舉之、詩云、蓋世英雄項與劉、曹姦馬謖實堪羞、阮生一掬西風淚、不爲前朝楚漢流、起結照應尤切、步兵廣武之嘆、實在曹姦馬謖、此詩千載之下、說破步兵心事、東坡曰、昔先友史經臣彥輔謂余、阮籍登廣武而嘆曰、時無英雄、使堅子成其名、豈謂沛公堅子乎、余曰、非也、傷時無劉項也、堅子指魏晉間人耳、

竹坡詩話有明上人者、作詩甚難、求捷徑於東坡、坡作兩詩與之、其一云、字字覓奇險、節節累枝葉、咬嚼三十年、轉更無交涉、其二云、衝口出常言、法度法前軌、人言非妙處、妙處在於是、便是作詩捷徑、

吳子行閉居錄云、晚宋作詩者多謬句、出遊

合の法を備ふ、一見了易し、今、初學の爲に之れを舉ぐ、詩に云ふ、蓋世の英雄項と劉と、曹姦馬謖實に羞づるに堪へたり、阮生一掬西風の淚、前朝楚漢の爲に流さずと、起結照應、尤も切なり、步兵廣武の嘆、實に曹姦馬謖に在り、此の詩千載の下、步兵の心事を說破す、東坡曰く、昔先友史經臣彥輔、余に謂ふ、阮籍、廣武に登りて嘆じて曰く、時に英雄無し、堅子をして其の名を成さしむと豈んぞ沛公を堅子と謂ふか、余曰く、非なり、時に劉項無きを傷むなり、堅子とは魏晉間の人を指すのみ、

竹坡詩話に、明上人といふ者あり、詩を作ること甚だ難しとす、捷徑を東坡に求む、坡、兩詩を作りて之れに與ふ、其の一に云ふ、字々奇險を覓むるは、節々枝葉を累す、咬嚼三十年、轉た更に交涉無し、其の一に云ふ、口を衝いて常言を出だす、法度前軌に法る、人は言ふ妙處に非ずと、妙處は是に在りと、便ち是れ詩を作るの捷徑なり、

吳子行の閉居錄に云ふ、晚宋、詩を作る者謬句多し、出遊

必云策杖門戶必曰柴扉結句多以梅花爲說、座腐可厭、余因聚其事爲一絕云、烹茶茅屋掩柴扉、雙鬢吟肩更撚鬚、策杖逋仙山下去、騷人正是興來時、或可爲作者戒也、吾黨亦多此種詩、錄博一噓。

七律起句最難、下手、柳子厚、城上高樓接大荒、海天愁思正茫茫、雄渾悲壯冠絕古今、其他如前後聯、對仗精確、不可勝數、又答劉連州邦字末句云、遙憐郡山好、謝守、但臨牕、注、謝守指安石也、安石嘗爲吳興太守、此說恐非、謝眺有窓中列遠岫之句、子厚用此。

盧照鄰長安古意、啼花戲蝶千門側、前有一群嬌鳥共啼花之句、戲蝶疑是嬌鳥之誤。

長病人將死、前二三日、戲體乍佳、不可以爲

には必ず策杖と云ふ門戸には必ず柴扉と曰ふ結句は多く梅花を以て説を爲す、座腐厭ふべし、余因りて其の事を聚めて一絶を爲る、云く茶を烹て茅屋に柴扉を掩ふ、吟肩を雙鬢して更に鬚を撚る杖を策する逋仙山下に去る、騷人正に是れ興來る時と、或は作者の戒と爲すべきなり、吾が黨も亦此の種の詩多し、録して一噓を博す。

七律起句、最も手を下し難し、柳子厚の「城上高樓大荒に接し、海天愁思正に茫茫、雄渾悲壯、古今に冠絶す、其他、前後聯の如き、對仗精確、勝つて數ふべからず、又、劉連州邦字に答ふる末句に云ふ、遙に憐む郡山の好きを、謝守但だ牕に臨む、注に、謝守は安石を指すなり、安石嘗て吳興の太守と爲ると、此の説恐くは非ならん、謝眺に、牕中遠岫列るの句あり、子厚此れを用ひしなり。

盧照の鄰長安古意に、花に啼く戲蝶千門の側と、前に、一群の嬌鳥共に花に啼く、の句あり、戲蝶は、疑ふらくは是れ嬌鳥の誤りならん。

長病の人將に死せんとする前二三日、氣體乍ち佳なり、

復常之兆紀少瑜詩云、殘燈猶未滅、將盡更揚輝、與此一般。

姜白石牽牛花詩、青花綠葉上疎籬、嫋嫋長條竹尾垂、老覺淡妝差有味、滿身風露立多時、題外傳神、朱子蘊亦有詩云、金鷗初動露華滋、最愛娟娟竹尾垂、多少紅樓昏夢裡、不知秋色到疎籬、朱竹垞曰、結句寫出花神在風露中、可謂絕唱、然比姜詩似退一步。

五雜俎云、錢氏子弟取書上瓜、各言子之的數、剖之以觀勝負、謂之瓜戰、邦俗兒女、剖栳試其實多少、與此相類、謂之栳戰亦可。

吾鄉自七月至九月、土人釣魚爲娛、然無用浮子者、余幼時在松阪、見一釣具、俗曰宇幾、即浮子也、其形如棗、塗以丹漆、頭插小羽莖、

以て常に復するの兆と爲す可からず、紀少瑜の詩に云ふ「殘燈猶未だ滅せず、將に盡きむとして更に輝を揚ぐ」と、此れと一般。

姜白石の牽牛花の詩に、青花綠葉疎籬に上り、嫋々たる長條竹尾に垂る、老ひて覺ゆ淡妝の差味有るを、滿身の風露立つこと多時、題外に神を傳ふ、朱子蘊も亦詩あり、云ふ、金鷗初て動いて露華滋し、最も愛す娟々竹尾に垂るを、多少の紅樓昏夢の裡、知らず秋色の疎籬に到るを」と、朱竹垞曰く、結句、花神の風露の中に在るを寫し出す、絶唱と謂ふべしと、然れども、姜詩に比すれば、一步を退くに似たり。

五雜俎に云ふ、錢氏の子弟、書上の瓜を取りて、各子の的數を言ふ、之れを剖きて以て勝負を觀る、之れを瓜戰と謂ふ、邦俗兒女栳を剖きて、其の實の多少を試む、此と相類す、之れを栳戰と謂ふも亦可。

吾が郷、七月より九月に至り、土人魚を釣りて娛と爲す、然して、浮子を用ふる者無し、余幼時、松阪に在り、一釣具を見る、俗に宇幾と曰ふ、即ち浮子なり、其の形、棗の如し、塗るに丹漆を以てす、頭に小羽莖を挿ひ、長さ四五分、又

長四五分、又以鑄線屈成兩股、插入于帶、以貫釣絲、隨水淺深、可以上下、投之水中、泛然直立、釣上二寸餘、擊小鉛錘、錘委地、則浮子、倒、故隨淺深而上、下之不與錘委地。凡魚中、鈎則浮子沒、鷄肋編云、釣絲之半繫荻梗、謂之浮子、視其沒、則知魚之中、鈎、韓退之釣魚詩、羽沈知食、駉、則唐世蓋浮以羽也。

古人以煖足爲湯婆、黃山谷名以脚婆、戲作詩云、小姬煖足臥、或能起心兵、千金買脚婆、夜夜睡天明、曾文清謂、山谷改竹夫人爲青奴、則脚婆當名錫奴、戲作一絕云、霧帳桃笙晝寢餘、此君那可一朝無、秋來零落同班扇、歲晚溫柔是錫奴、煖足瓶此云、由多留、吾鄉郭北田園種麥以充租、既刈麥、又插秧、漢土亦有類此者、向雪湖田家詩云、樵罷歸

銅線を以て兩股を屈成す、挿みて帶に入る、以て釣絲を貫く、水の淺深に隨ひて、以て上下すべし、之れを水中に投れば、泛然として直立す、釣の上二寸餘、小鉛錘を繫ぐ、錘地に委すれば、則ち浮子倒る、故に淺深に隨ひ而して、之れを上下し、錘をして地に委せしめず、凡そ魚鈎に中れば、則ち浮子沒す、雞肋編に云ふ、釣絲の半、荻梗を繫ぐ、之れを浮子と謂ふ、其の沒するを視て、則ち魚の鈎に中るを知る、韓退之の釣魚の詩に、羽沈んで食の駉るを知る」と、則ち唐の世蓋浮ぶるに羽を以てせしならん。

古人足を煖むる瓶を以て湯婆と爲す、黃山谷名づくるに脚婆を以てす、戲に詩を作りて云ふ、小姬足を煖めて臥せば、或は能く心兵を起さん、千金、脚婆を買ふ、夜々天明に睡ると、曾文清謂ふ、山谷、竹夫人を改めて青奴と爲す、則ち脚婆は當に錫奴と名づくべし、戲に一絶を作りて云ふ、霧帳桃笙晝寢の餘、此の君那ぞ一朝も無かる可けん、秋來零落して班扇に同じ、歲晚れて溫柔是れ錫奴と、煖足瓶、此に由多留と云ふ。

吾が郷郭北の田園、麥を種ゑて以て租に充つ、既に麥を刈りて又た秧を挿む、漢土も亦此れに類する者あり、向雪湖の田家の詩に云ふ、樵罷んで歸り來て麥を打つこと

來打麥忙、要梨、舊壤挿新秧。

水東日記云、吳人耕作或舟行之勞、多謳歌以自遣、名唱山歌、南山頭上鶉鴿啼、見說親爺娶、晚妻爺娶、晚妻猶自可、前娘兒女好孤棲、此等無情漢子所在、比比有之、不勝浩嘆。梅花開時蝶未化、牛僧別舸蝶詩、每向東風恰薄命、一生不得近梅花、此意古人未曾道及、林和靖梅詩、霜禽欲下先偷眼、粉蝶如知合斷魂、如知二字、婉曲有餘意。

李長吉詩稱曰、牛鬼蛇神、然亦有豔麗動人者、難忘曲云、夾道開洞門、弱楊低畫戟、簾影竹華起、簫聲吹日色、蜂語繞妝鏡、畫蛾學春鶯、亂繫丁香梢、滿欄花向夕、佳句云、竹香滿、凄寂、紛節塗生翠、奇峭可喜、又有杯池白魚

忙し舊壤を犁して新秧を挿まんと要す。

水東日記に云ふ、吳人耕作、或は舟行の勞ある、多くは謳歌して以て自ら遣る、唱山歌と名づく、南山の頭上に鶉鴿啼く、見説く親爺の晚妻を娶るを爺、晚妻を娶る猶自ら可なり、前娘の兒女好く孤棲すと、此れ等無情漢子、所在比々之れ有り、浩嘆に勝へず。

梅花開く時、蝶未だ化生せず、僧別舸の蝶の詩に、毎に東風に向つて薄命を恰む、一生、梅花に近くを得ず、此の意、古人未だ會て道ひ及ばざり、林和靖の梅の詩に、霜禽下らんと欲して先づ眼を偷む、粉蝶如し知らば合に斷魂すべしと、如知の二字、婉曲にして餘意あり。

李長吉の詩稱して牛鬼蛇神と曰ふ、然れども、亦豔麗人を動かす者あり、難忘曲に云ふ、道を夾んで洞門を開く、弱楊畫戟に低る、簾影竹華起り、簫聲日色を吹く、蜂語妝鏡を繞り、畫蛾春鶯を學ぶ、亂繫す丁香の梢、欄に滿ちて花夕に向ふ、佳句に云ふ、竹香滿ちて凄寂、紛節塗生翠を塗る、奇峭喜ぶ可し、又、杯池白魚小の句あり、注に、杯池は池の小なるを、極めて其の小々、僅に杯に似たるを言ふの

小之句注、杯池、池之小者、極言其小小、僅似杯耳、天教、胡馬戰、曉雲皆血色、與常建、戰餘落日黃、軍敗鼓聲死、千古對壘。

釋親鸞創立一向眞宗、養妻子、喫酒肉、貴賤上下、一視平等、於是天下穢戶皆爲檀越、金錢如土、富敵王侯、可謂孟鉢中一豪傑也、然亦有據馬祖嘗應屠者之請、降詣其舍、士庶驚駭、咸稱異哉、祖曰、佛性是同、無生豈別、但可度者、吾其度之、何異之有、釋窺基字洪道、樊師諷之出家、基曰、聽我三事、方誓出家、不斷情欲、葷血過中、食也、樊先以欲勾牽令入、佛智、伴而肯焉、行駕異、載前之所欲、故關輔語曰、三車和尚亦非枯木寒巖之徒也。

長峯妓樓、每春四方遊客輻湊、或有六七十

み、天、胡馬をして戦はした、曉雲皆血色は常建の「戰餘落日黃なり、軍敗れて鼓聲死す」と、千古の對壘。

釋親鸞、一向眞宗を創立す、妻子を養ひ、酒肉を喫す、貴賤上下、一視平等、是に於て、天下の穢戶、皆檀越と爲る、金錢土の如く、常、王侯に敵す、孟鉢中の一豪傑と謂ふべきなり、然れども、亦據るところあり、馬祖嘗て屠者の請ひに應じ、降りて其の舍に詣る、士庶驚駭して、咸な異哉と稱す、祖曰く、佛性はれ同じ、無生豈に別たんや、但だ度すべき者、吾其れ之れを度せん、何の異とすることか之れ有らんと、釋窺基字は洪道、樊師之れに出家を諷す、基曰く、我に三事を聽さば、方に誓ひて出家せん、情欲を斷たず、葷血、食に中るに過ぐるなりと、樊、先づ勾牽して佛智に入らしめんと欲するを以て、伴りて肯んず、行駕に前の欲する所を異載す、故に關輔語りて曰く、三車和尚も亦枯木寒巖の徒に非ざるなりと。

長峯の妓樓、每春四方の遊客輻湊す、或は六七十人、社を

人結社同遊者、翌朝命駕登朝熊岳、衆妓要之歸路、前宵醉夢中、往往不識其面、輿卒絡繹錯認別人、於是預以片紙記客姓名、各結于簪、呼名就輿、余戲賦絕句云、紅塵滾滾滿花街、酒慢風翻醉面佳、多少美人迎客處、銀簪名刺異銀牌、唐官妓佩銀牌、刻名其上、李賀詩、今日見銀牌。

孟郊詩、鬢邊雖有絲、不堪織寒衣、一家機軸、近人所喜、然過巧失實、非大雅之音也。

常建詩、碧海瑩子神、玉膏澤人骨、按碧海疑是水碧之誤、西溪叢語、嘗聞李白過彭蠡湖詩云、水碧或可採、金膏祕莫言、江文通詩云、水碧驗未贖、金膏靈詎緇、注翰曰、水碧玉也、金膏仙藥也、又云、傲睨摘朮芝、凌波採水

結びて同じく遊ぶ者あり、翌朝駕を命じて朝熊岳に登る、衆妓之れを歸路に要す、前宵醉夢中、往々其の面を識らず、輿卒絡繹し、錯りて別人を認む、是に於て、預め片紙を以て、客の姓名を記し、各簪に結ぶ、名を呼びて輿に就く、余戲に絶句を賦す云ふ、紅塵滾々花街に滿つ、酒慢風翻つて醉面佳なり、多少の美人客を迎ふる處、銀簪の名刺銀牌に異なり、唐の官妓、銀牌を佩び、名を其の上に刻す、李賀の詩に、今日銀牌を見る」と。

孟郊の詩に「鬢邊絲有り」と雖ども、寒衣を織るに堪へず」と、一家の機軸、近人の喜ぶ所、然れども、巧に過ぎて實を失す、大雅の音に非ざるなり。

常建の詩に「碧海、子神瑩たり、玉膏、人骨を澤す」と、按ずるに、碧海は、疑らくは是れ水碧の誤りならん、西溪叢語に嘗て李白の彭蠡湖を過ぐる詩を記す、云く、水碧或は採る可し、金膏祕して言ふべし、江文通の詩に云ふ、水碧驗すれども未だ贖れず、金膏靈詎を緇き、注に、翰曰く、水碧は水玉なり、金膏は仙藥なり、又云ふ、睨を傲して朮芝を摘む、波を凌いで水碧を採る、謝靈運の彭蠡湖口に入

碧謝靈運入彭蠡湖口作金膏滅明光水碧
 緩流溫注云水碧水玉也此江中有之然皆
 滅其光明止見溫潤穆天子傳河伯示黃金
 之膏山海經云耿山中多水碧余嘗見墨子
 道書大藥中有水脂碧者當是按水碧金膏
 相對爲句所從來久矣余著唐詩正聲箋注
 常建碧海句欠考證故追錄。

淮南子好憎者心之過也嗜欲者性之累也
 人大怒破陰大喜墜陽薄氣發瘡驚怖爲狂
 憂悲多恚病乃威積醫書所稱積聚卽此。
 又云夫善游者溺善騎者墮各以其所好反
 自爲禍詩人多招口禍亦然。

阮元兖州道中詩云平田泉水自成渠村口
 秋林日影疎著我肩輿安穩過半看黃葉半

るの作に金膏明光を滅し水碧流溫を緩る注に云ふ水
 碧は水玉なり此の江中に之れ有り然れども皆其の光
 明を滅す止だ溫潤を見る穆天子傳に河伯黃金の膏を
 示すと山海經に云ふ耿の山中に水碧多しと余嘗て墨
 子道書を見るに大藥中に水脂碧といふ者あり當に是
 れなるべし按ずるに水碧金膏相對して句を爲す從來
 する所久し余唐詩正聲箋注を著す常建の碧海の句考
 證を欠ぐ故に追録す。

淮南子に好憎は心の過なり嗜欲は性の累なり人大に
 怒れば陰を破る大に喜べば陽を墜す薄氣は瘡を發し
 驚怖は狂と爲り憂悲恚多きは病乃ち積を成すと醫書
 に積聚と稱する所は卽ち此れなり。

又云ふ夫れ善く遊ぐ者は溺れ善く騎る者は墮つ各其
 の好む所を以て反つて自ら禍を爲すと詩人多く口禍
 を招くも亦然り。

阮元の兖州道中の詩に云ふ平田泉水自ら渠を成す村
 口秋林日影疎なり我を著して肩輿安穩に過ぐ半は黃
 葉を看半は書を看ると秋冬の際山村の病家余を邀ふ

看書秋冬之際、山村病家、邀余與中、每誦此詩、真與我心相合、勝於自苦覓句矣。

宋史梅堯臣嘗語人曰、凡詩意新語工、得前人所未到者、斯爲善矣、必能狀離寫之景、如在目前、含不盡之意、見於言外、然後爲至也、世以爲知音。

楊子載云、欄邊花草牛羊路、寺裡人家杵臼聲、余每遊菩提山、覺此句之妙。

謝氏詩源、袁攏秋日詩曰、芳草不復綠、王孫今又歸、人都不解、施廕見之曰、王孫蟋蟀也、按此反用楚辭王孫去兮草萋萋之語、施說牽強不可從。

阮元湘江村舍詩云、湘山翠黛、湖水如碧玉、巖下有居人、林深不見屋、落落百尺松、陰

輿中每以此詩誦、真以我が心と相合ふ、自ら苦みて句を覓むるに勝れり。

宋史に梅堯臣嘗て人に語りて曰く、凡そ詩は、意新に語工に、前人の未だ到らざる所の者を得る、斯れを善と爲す、必ず能く寫し難きの景を狀して、目前に在るが如くし、不盡の意を含みて、言外に見る、然る後至れりと爲すなりと、世以て知音と爲す。

楊子載云と欄邊の花草牛羊の路、寺裡の人家杵臼の聲と、余菩提寺に遊ぶ毎に、此の句の妙を覺ゆ。

謝氏詩源に、袁攏の秋日の詩に曰く、芳草復た綠ならず、王孫今又歸ると、人都不解せず、施廕之れを見て曰く、王孫は蟋蟀なりと、按ずるに、此れ楚辭の「王孫去つて草萋々」の語を反用す、施の説は牽強にして、從ふべからず。

阮元の湘江村舍の詩に云ふ、湘山翠黛の如く、湖水碧玉の如し、巖下に居人有り、林深くして屋を見ず、落落百尺の松、陰々萬竿の竹、竹密にして一逕空し、照らし見て人

陰萬竿竹、竹密一逕空、照見人皆綠、況有流泉聲、清冷比琴筑、如此山居幽、其人定無俗、笑我坐蓬牕、秋陽正相曝、此詩非唐非宋、又非元明、自是一家風調、余與社友飲竹林中、視之顏色皆青、益感造語之妙、楊誠齋過南陽詩云、近岫遙峰翠作圍、平田小港碧行遲、垂楊一逕深深去、阿那人家住得奇、碧行二字甚奇。

或問芥子園畫譜序題云、古重陽、重陽稱古何義、余曰、卽今九月九日也、唐文宗開成元年、歸融爲京兆尹、時兩公主出降、府司供帳事繁、又俯近上、已曲江賜宴、奏請改日、上曰、去年重陽取九月十九日、未失重陽之意、今改取十三日、可、東坡文集云、嶺南氣候不常、

皆綠なり、況んや流泉の聲有り、清冷琴筑に比す、此くの如き山居の幽なる、其の人定めて俗なからん、笑ふ我が蓬牕に坐するを、秋陽正に相曝すと、此の詩、唐に非ず、宋に非ず、又元明に非ず、自らはれ一家の風調、余、社友と竹林の中に飲す、之れを視るに、顏色皆青し、益造語の妙を感ず、楊誠齋の南陽を過ぐる詩に云ふ、近岫遙峰翠圍を作す、平田小港碧行遲し、垂楊一逕深々に去る、阿那人家住し得て奇なりと、碧行の二字甚だ奇なり。

或ひと問ふ、芥子園畫譜の序に、題して古重陽と云ふ、重陽に古と稱するは何の義ぞ、余曰く、卽ち今の九月九日なり、唐の文宗開成元年、歸融、京兆の尹と爲る、時に兩公主出で、降る、府司、供帳事繁なり、又俯して上、已曲江宴を賜ふに近し、奏して日を改めんと請ふ、上曰く、去年重陽、九月十九日を取る、未だ重陽の意を失はず、今改めて十三日を取りて可なりと、東坡文集に云ふ、嶺南の氣候常ならず、余嘗て謂ふ、菊花開く時、卽ち重陽と、十月初吉、

余嘗謂菊花開時、卽重陽、十月初吉、菊始開、乃與客作重九、文宗以九月十九日作重陽、坡公以十月朔作重陽、故以古字分之、蓋清人好奇之弊也。

邦人詠史題畫之類、不過敷陳故事、令人一見引睡、因舉古人傑作、以示初學、袁景文題李陵泣別圖云、上林木落鴈南飛、萬里蕭條使節歸、猶有交情兩行淚、秋風吹上漢臣衣、沈歸愚評云、詞婉意嚴、李陵之罪自見、漢臣二字、春秋之筆、譚貞良詩云、都尉臺前起朔風、節旄空盡路西東、不知別淚誰先落、同在河梁夕照中、比諸袁詩、似讓一步、然其罪李陵、隱然溢于言外、同字著眼、王澤題徽宗畫瓶中桂花云、玉色官餅出內家、天香誰貯月

菊始めて開く、乃ち客と重九を作す、文宗は九月十九日を以て重陽を作し、坡公は十月朔を以て重陽を作す、故に古の字を以て之れを分つ、蓋清人奇を好むの弊なり。

邦人の詠史題畫の類、故事を敷陳するに過ぎず、人をして一見して睡を引かしむ、因りて古人の傑作を擧げて以て初學に示す、袁景文の李陵泣別の圖に題するに云ふ、上林木落うて雁南に飛ぶ、萬里蕭條使節歸る、猶交情兩行の涙有り、秋風吹き上る漢臣の衣と、沈歸愚の評に云ふ、詞婉に意嚴なり、李陵の罪自ら見る、漢臣の二字は春秋の筆なり、譚貞良の詩に云ふ、都尉臺前朔風起る、節旄空しく盡きて路西東、知らず別淚誰か先づ落つ、同じく河梁夕照の中に在りと、諸れを袁の詩に比すれば、一步を讓るに似たり、然れども、其の李陵を罪する、隱然として言外に溢る、同の字著眼、王澤の徽宗の畫ける瓶中の桂花に題するに云ふ、玉色官餅内家より出づ、天香誰か月中の花を貯ふ、六宮只だ愛す新涼の好きを、道はず金風翠華を卷く、張迪の徽宗半開の梅花に題するに云

中花、六宮只愛新涼好、不道金風卷翠華、張
昶題徽宗半開梅花云、上皇朝罷酒初酣、寫
出梅花藥半含、惆悵汴宮春去後、一枝流落
到江南、盧湛題趙松雪蒼溪圖云、王孫今代
玉堂仙、自畫蒼溪似剡川、如是青山紅樹底、
可無十畝種瓜田、戴冠題姚少師畫竹云、次
其韻、北地風高卷塞雲、驚沙吹起鴈成群、客
邊偶寫龍孫譜、忘卻江南有此君、歸愚曰、嘉
定王常題徽宗畫百合圖云、偶爲美名圖百
合、不知南北已瓜分、頗有思致。

ふ上皇朝罷んで酒初めて酣なり、寫し出す梅花藥半は
含む、惆悵す汴宮春去つて後、一枝流落江南に到る、盧湛
の趙松雪蒼溪の圖に題するに云、王孫は今代玉堂の仙、
自ら蒼溪を畫いて剡川に似たり、是くの如き青山紅樹の
底十畝の瓜を種うる無かる可けむや、戴冠の姚少師の
畫竹に題するに云、其の韻に次す、北地風高くして塞雲
を卷く、驚沙吹き起つて雁、群を成り、客邊偶寫す龍孫の
譜、忘卻す江南に此の君有るを、歸愚曰く、嘉定の王常
が徽宗の畫ける百合の圖に題するに云、偶、美名の爲に
百合を圖す、知らず南北已に瓜分と、頗る思致あり。

靜寄餘筆に、豫の山中に、一老杉有り、其の大蓋百圍と
云ふ、亦世の未だ聞かざる所、旁に小聚落有り、因りて呼
びて杉村と曰ふ、吾が郷、宮川の上游十里餘の山中にも
亦一大杉あり、因りて其の地を稱して大杉谷と曰ふ、土
人稱して神代の物と爲す、其の大さ幾百丈なるを知ら
ず、偶幹の大さを度る者あれば、即ち災ありと、土人懼れ

百丈、偶有度幹大者、卽災、土人懼而祭之。

黃嘉仁田家詩云、烟含暝色入村場、一畝平田隔草堂、急雨初收新水滿、藕花香雜稻花香、一日余伴讀小林公堂、歸途過王中島、荷花盛開、口誦此詩、不裁一句、蓋爲茲境傳神。

林鴻飲酒詩、儒生好奇古、出口談唐虞、儒生羲皇前、所談乃何如、古人既已死、古道存遺書、一語不能踐、萬卷徒空虛、我願但飲酒、不復知有餘、君看醉鄉人、乃在天地初、好古之癖、或陷于迂、察其所爲、不過紙上空談、此詩雖過激、亦有所見。

方鵬知足吟云、人見白髮悲、我見白髮喜、多少賢達人、不見白髮死、高才李長吉、有道文中子、行年未三十、相與歸蒿里、吾生已倍之、

て之れを祭る。

黃嘉仁の田家の詩に云ふ、烟は含む暝色村場に入る、一畝の平田草堂を隔つ、急雨初めて收つて新水滿つ、藕花香は稻花香に雜る、一日、余、小林公堂に伴讀す、歸途王中島を過ぐ、荷花盛に開く、口づから此の詩を誦し、一句を裁せず、蓋、茲の境の傳神と爲す。

林鴻の飲酒の詩に、儒生好奇を好む、口を出だせば唐虞を談す、然し羲皇の前に生れば、談する所乃ち何如ん、古人既已に死し、古道遺書に存す、一語踐む能はずんば、萬卷徒に空虛、我願くは但だ酒を飲み、復た有餘を知らざらん、君看よ醉郷の人、乃ち天地の初めに在るを、と、好古の癖、或は迂に陷る、其の爲す所を察するに、紙上の空談に過ぎず、此の詩、過激と雖ども、亦見る所あり。

方鵬の知足吟に云ふ、人は白髮を見て悲む、我は白髮を見て喜ぶ、多少賢達の人、白髮を見て死せず、高才の李長吉、有道の文中子、行年未だ三十ならず、相與に蒿里に歸す、吾が生已に之れに倍す、鏡に對して宜しく莞爾すべ

對鏡宜莞爾、達生之語足排老愁、沈千運詩、近世多天

儻、嘗見髮變
白、沈唐人。

汪應軫登浮峯寺云、攝衣入空山、白雲留我

住、我欲臥白雲、白雲又飛去、奇想自天外落。

東坡詩云、人似秋鴻來有信、事如春夢了無

痕、江城白酒三杯釀、野老蒼顏一笑溫、初讀

二聯如不用意、然其精鍊之工、熟讀而後可

知焉、以實對虛、四句渾成、又云、門前人鬪馬

嘶急、一家喜氣如春醖、若作春酒、意味索然、

東坡曰、余嘗論學者之有說文、如醫之有本

草、雖草木金石各有本性、而醫者用之、所配

不同、則寒溫補瀉之效、隨用各別、而自漢以

來學者、多以一字考經、字同義異、皆欲一之、

彫刻采繪必成其說、是六經不勝異說、而學

しと、達生の語、老愁を排するに足れり、沈千運の詩に、近世天傷多し、喜び見る鬢髮の白きを、と、沈は唐の人。

汪應軫の浮峯寺に登るに云ふ、衣を擲けて空山に入る、白雲我を留めて任せしむ、我れ白雲に臥せんと欲す、白雲又飛び去ると、奇想天外より落つ。

東坡の詩に云ふ、人は秋鴻に似て來つて信有り、事は春夢の如く了に痕無し、江城白酒三杯の釀、野老の蒼顏一笑温なり、初めて二聯を讀むに、意を用ひざるが如し、然れども、其の精鍊の工、熟讀して而して後知るべし、實を以て虚に對し、四句渾成す、又云ふ、門前人鬪くして馬嘶くこと急なり、一家の喜氣春醖の如しと、若し春酒に作らば、意味索然たり。

東坡曰く、余嘗て論ず、學者の説文有るは、醫の本草有るが如し、草木金石と雖ども、各本性あり、而して醫者之れを用ひ配する所同じからず、則ち寒溫補瀉の效用に隨ひて各別なり、而して漢より以來、學者多く一字を以て經を考ふ、字同じくして義異なり、皆之れを一にせんと欲す、彫刻采繪、必ず其の説を成す、是れ六經の異説に勝へず、而して學者疑ふ、初學善く此の意を了せば、其の文

者疑焉、初學善了此意、其於文學無不如意、余謂醫之於方亦然、一草一木、分其主治、所謂數車無車、遂不能得活用之妙也。

孔子一貫指忠恕、孟子惡執、一者謂偏于一邊、凡字義隨前後語氣而異、不可泥執也。

今人贈答詩中、動用知己字、察其交際、猶待路人、古之所謂知己者、蓋其自許不輕、故待人亦重、豫讓曰、士爲知己者死、虞仲翔曰、海內得一知己、死不恨、韓文公曰、感恩則有之、知己則未也、知己豈容易哉、潛丘劄記、引後漢王丹傳曰、交道之難、未易言也、世稱管鮑、次則王賁、張陳凶其終、蕭朱隙其末、故知全之者鮮矣。

周賀拔岳不讀兵書、而暗與之合、本朝武將

學に於て、意の如くならざるは無し、余謂ふ、醫の方に於けるも亦然り、一草一木、其の主治を分たば、謂はゆる車を數へて車無し、遂に活用の妙を得ること能はざるなり。

孔子の一貫は、忠恕を指す、孟子の惡ぞ一を執らんとは、一邊に偏するを謂ふ、凡そ字義は、前後の語氣に隨ひて而して異なり、泥執すべからざるなり。

今人贈答の詩中、動すれば、知己の字を用ふ、其の交際を察するに、猶路人を待つがごとし、古の謂はゆる知己は、蓋其の自ら許すこと輕からず、故に人を待つ亦た重し、豫讓曰く、士は己を知る者の爲に死す、虞仲翔曰く、海内、一知己を得ば、死すとも恨みず、韓文公曰く、恩に感ずることは則ち之れ有り、知己は則ち未しと、知己豈に容易ならんや、潛丘劄記に、後漢の王丹の傳を引きて曰く、交道の難き、未だ言ひ易からざるなり、世に管鮑を稱す、次は則ち王賁なり、張陳は、其の終を凶す、蕭朱は、其の末に隙あり、故に之れを全うするを知る者は鮮し。

周の賀拔岳、兵書を讀まず、而して暗に之れと合ふ、本朝

多有此種人。漢武帝嘗欲以孫吳兵法教霍去病。對曰：「願方略何如耳，不至學古兵法。」

謝在杭曰：「疏注不足，以翼經，而反累經者也。實錄不足，以爲史，而反累史者也。千古快論，警發腐儒，備忘錄、劉靜修詩、記錄紛紛已失，真語言輕重在詞臣。若將字字求心術，恐有無邊受屈人。大抵漢代而降，史書多不足信，而三百年來尤甚。讀史者觀其人之可信而信之，則庶乎少失矣。」

呂氏童蒙訓前輩嘗說：「後生才性過人者，不足畏，惟讀書尋思推究者爲可畏耳。余少時同學有早慧者，遂無成矣。謝在杭曰：曾子七十廼學詩，荀卿五十始學禮，公孫弘四十方讀書，朱雲亦四十始學易論語，皇甫謐二十始授孝經，而皆成大儒。早慧者莫敢望焉，余

の武將多く此の種の人有り、漢の武帝嘗て孫吳の兵法を以て、霍去病に教へんと欲す、對へて曰く、方略何如と願みるのみ、古の兵法を學ぶに至らずと。

謝在杭曰く、疏注は以て經に翼するに足らず、而して反つて經を累す者なり、實錄は以て史と爲すに足らず、而して反つて史を累す者なりと、千古の快論腐儒を警發す、備忘錄に、劉靜修の詩に、記錄紛々已に眞を失す、語言の輕重詞臣に在り、若し字々を將つて心術を求めば、恐くは無邊屈を受くるの人有らんと、大抵漢代より而降、史書多く信するに足らず、而して三百年來尤も甚し、史を讀む者、其の人の信す可きを觀て、而して之れを信すれば、則ち失少きに庶し。

呂氏童蒙訓に、前輩嘗て説く、後生才性の人、に過ぎたる者は、長るゝに足らず、惟だ書を讀みて、尋思推究する者、畏るべしと爲すのみと、余少き時、同學に早慧の者有り、遂に成ると無し、謝在杭曰く、曾子七十にして廼ち詩を學ぶ、荀卿五十にして始めて禮を學ぶ、公孫弘四十にして方に書を讀む、朱雲も亦四十にして始めて易論語を學ぶ、皇甫謐二十にして始めて孝經を授かる、而して皆大儒と成る、早慧の者、敢て望む莫しと、余謂ふ、人に才不才

謂人有才不才、然其成業在乎學而不倦、每對後進、引此數子以加勉厲。

金剛寺菅公祠前有白太夫石、云、菅公所賜太夫、便袖而歸、置于寺中、後人稱曰、袂石、大四尺許、或駁其妄傳、按菅原傳奇所謂白太夫者、即松木春彦也、春彦嘗受公之知、屢謁門下、春彦有三子、傳奇附會以松竹梅、父子之名、喧傳世上、酉陽雜俎云、利州臨江寺石得之水中、初才如拳、置佛殿中、石遂長不已、經年重四十斤、然則此石既經千有餘年、其長亦未可知也。

吾邑久志本氏、藏僧虎關書朱子元亨利貞說一幅、無款、筆力遒勁、有涪翁風、僧光虔詳記來由、別成一幅、足以證其爲真蹟也、元應

あり、然して其の成業は學びて而して倦まざるに在り、毎に後進に對し、此の數子を引きて、以て勉厲を加ふ。

金剛寺の菅公の祠前に、白太夫の石有り、云ふ、菅公の太夫に賜ふ所、便ち袖にして歸り、寺中に置く、後人稱して袂石と曰ふ、大さ四尺許り、或は其の妄傳を駁す、按ずるに菅原傳奇に謂はゆる白太夫は、即ち松木春彦なり、春彦嘗て公の知を受く、屢門下に謁す、春彦に三子あり、傳奇附會するに松竹梅を以てす、父子の名、世上に喧傳す、酉陽雜俎に云ふ、利州の臨江寺の石、之れを水中に得たり、初は才に拳の如し、佛殿中に置く、石遂に長じて已まず、年を経て、重さ四十斤と、然らば則ち此の石既に千有餘年を経たり、其の長ずるも亦未だ知るべからざるなり。

吾が邑の久志本氏、僧虎關の書の朱子元亨利貞の説一幅を藏す、款無し、筆力遒勁、涪翁の風あり、僧光虔、詳に來由を記し、別に一幅を成す、以て其の眞蹟たるを證するに足るなり、元應元年、四書朱注、始めて本邦に來る、獨清軒

元年、四書朱注始來本邦、獨清軒健叟首唱、程朱之學、今觀此書、益知當時尊信朱注、國朝諫諍錄、引長濟草、以垂水廣信爲讀朱注者之祖、據兵家茶話、垂水廣信實無其人、長濟草蓋盲者玄信僞作也、光虔延寶年間人、與久志本氏爲方外友。

久志本氏同宗、藏大覺禪師書一幅、字字沉着、善得唐人筆意、道春先生爲之小記、吾邑書幅以此爲第一、松田脩善書、好臨古今名跡、近就主人鈎摸此幅、運筆縱橫不差毫末、欲以上石流布海內。

楊升菴藝林伐山云、吳元濟將敗之兆、裴度征淮西、掘得一碑、上有諸云、井底三竿竹、竹色深深綠、鷄未肥、酒未熟、障車兒郎且須縮。

健叟首として程朱の學を唱ふ、今此の書を觀て、益知る當時朱注を尊信することを、國朝諫諍錄に、長濟草を引きて、垂水廣信を以て、朱注を讀む者の祖と爲す、兵家茶話に據るに、垂水廣信實に其の人無し、長濟草は、益盲者玄信の僞作なり、光虔は、延寶年間の人、久志本氏と、方外の友たり。

久志本氏の同宗に、大覺禪師の書一幅を藏す、字々沈著、善く唐人の筆意を得たり、道春先生之れが小記を爲る、吾が邑、書幅此れを以て第一と爲す、松田脩善書を善くす、好みて古今の名蹟を臨す、近主人に就きて、此の幅を鈎摸す、運筆縱橫、毫末を差へず、以て石に上して、海内に流布せんと欲す。

楊升庵の藝林伐山に云ふ、吳元濟の將に敗れんとするの兆、裴度、淮西を征し、一碑を掘り得たり、上に諸有り、云ふ「井底三竿の竹、竹色深々綠なり、鷄未だ肥えず、酒未だ熟せず、障車の兒郎且つ須らく縮すべし、鷄未だ肥えずは、月の字を去れば、乃ち己の字、酒未だ熟せずは、乃ち西の

鷄求肥、去月字乃巳字、酒未熟乃
 酉字、後果已酉日、繪、吳元濟也、宋人四六、學
 慙鼠獄、智乏鷄碑、下句正用此事、按升菴說
 非、筆精云、戴逵總角日、以鷄卵汁、澆白瓦、作
 鄭玄碑、又自爲文而自鑄、詞麗器妙、唐丁用
 晦云、學慙鼠獄云、其謂宋人亦誤。

元史、伯顏謂宋將作監柳岳曰、爾宋昔得天
 下於小兒之手、今亦失之小兒之手、蓋天道
 也、不必多言、周公謹雜識、載北客詩云、憶昔
 陳橋兵變時、欺他寡婦與孤兒、誰知二百餘
 年後、寡婦孤兒又被欺、輟耕錄云、宋之興始
 於後周恭帝顯德七年、恭帝方八歲、及其亡
 也、終於少帝德祐元年、少帝時四歲、名顯、而
 顯德二字竟與得國合、周以主幼而失國、宋
 亦以主幼而失國、周有太后在上、宋亦有太

字、後果して已酉の日は、吳元濟を擒にするなり、宋人の
 四六に、學は鼠獄に慙ぢ、智は鷄碑に乏しと、下句正に此
 事を用ふと、按するに、升庵の説、非なり、筆精に云ふ、戴
 逵、總角の日、鷄卵汁を以て白瓦を澆し、鄭玄の碑を作る、
 又、自ら文を爲りて而して自ら鑄す、詞麗に器妙なり、唐
 の丁用晦云ふ、學は鼠獄に慙づ云々と、其宋人と謂ふは
 亦た誤れり。

元史に、伯顏、宋の將作監柳岳に謂ひて曰く、爾宋、昔、天
 下を小兒の手に得たり、今亦之れを小兒の手に失す、蓋
 天道なり、必ずしも多言せずと、周公謹の雜識に、北客の
 詩を載せて云ふ、憶昔陳橋兵變の時、欺く他の寡婦
 と孤兒とを、誰か知らん二百餘年の後、寡婦孤兒又た欺
 かる、輟耕錄に云ふ、宋の興る、後周の恭帝顯德七年に始
 る、恭帝方に八歲、其の亡ぶるに及びてや、少帝德祐元年
 に終る、少帝時に四歲、名は顯、而して顯德の二字、竟に國
 を得ると合す、周、主幼なるを以て、而して國を失ふ、宋も
 亦主幼なるを以て、而して國を失ふ、周は、太后の上にて在
 る有り、宋も亦太后の上にて在る有り、始終興亡の數、昭然
 たること、此くの如し。

后在上、始終興亡之數、昭然如此。

彫菰米、詩中多斷曰菰米、杜詩、波漂菰米、沈雲黑、卽此梁簡文大堤曲、炊彫留上客、黃酒逐神仙、此指菰米、單曰彫也、蓬牕續錄、彫胡卽菱草中生、齒如瓜形可食、故謂之苽、霜凋時採、故謂之凋、因訛爲彫、管子謂之鴈膳。

茶山翁詩云、郊雲釀雨夜山低、家指長松亂竹西、山陽評曰、夜山低三字、自先生闕之、按高青丘詩、歸時不覺晚、山與夕陽低、戴喻讓詩、夜氣壓山低一尺、吳梅村詩、月出萬山低、古人既道破、家指二字不妥、當作家在、又尋涼詩云、何處尋涼去、行窮野水源、泉從庭際湧、雲傍屋端屯、大石晴猶濕、長林午欲昏、尋涼何處好、涼在水源村、何處尋涼去、行窮野

彫菰米、詩中に多く斷じて菰米と曰ふ、杜詩に「波は菰米を漂して沈雲黒し」、卽ち此れなり、梁の簡文の大堤曲に「彫を炊きて上客を留め、酒を貰して神仙を逐ふ」、此れ菰麥を指して單に彫と曰ふなり、蓬牕續錄に、彫胡卽ち菰草中に齒を生ず、瓜の形の如し、食ふべし、故に之れを凋と謂ふ、霜凋の時に採る、故に之れを凋と謂ふ、因りて訛りて彫と爲す、管子に、之れを鴈膳と謂ふ。

茶山翁の詩に云ふ、郊雲雨を釀して夜山低る、家は指す長松亂竹の西と、山陽の評に曰く、夜山低の三字は、先生より之れを闕くと、按ずるに、高青丘の詩に、歸る時晚きを覺えず、山は夕陽と低る、戴喻讓の詩に、夜氣山を壓して低る、と一尺、吳梅村の詩に、月出で、萬山低ると、古人既に道破す、家指の二字安ならず、當に家に作るべし、又、涼を尋ぬる詩に云ふ、何の處か涼を尋ねて去る、行と窮む野水の源、泉は庭際より湧き、雲は屋端に傍ふて屯す、大石晴れて猶ほ濕ひ、長林午に昏からんと欲す、涼を尋ねて何の處か好き、涼は水源の村に在り、何の處か涼を尋ねて去らむ、行と窮む野水の源、漁童沙際に聚り、

水源、漁童沙際聚、浣女竹邊喧、田漁分、蓮影、徒枉落、漲痕、尋、涼何處好、涼在、水源村、評曰、關、天地未有之體、余讀、五代詩話、閩僧懷濟有詩二絕云、家在閩山東復東、其中歲歲有花紅、而今再到花紅處、花在舊時紅處、家在閩山西復西、其中歲歲有鶯啼、而今再到鶯啼處、鶯在舊時啼處啼、此翁所本、其一二句法、亦祖香山春深詩。

王漁洋詠史小樂府二十四首、曰小平津、曰卿曹拜、曰殺田豐、曰戮魏親、曰赦雍齒、曰丹陽婦、曰卿慙長、曰寄當歸、曰借荊州、山陽日本樂府題目倣之。

張橫渠曰、人多言安於貧賤、其實只是計窮力屈才短不能營畫耳、若稍動得、恐未肯安。

浣女竹邊に喧し、田漁、蓮影を分ち、徒枉漲痕に落つ、涼を尋ぬ何の處か好き、涼は水源の村に在りと、評に曰く、天地未だ有らざるの體を關くと、余、五代詩話を讀むに、閩の僧懷濟詩二絶有り云ふ、國は閩山の東復た東に在り、其中歲々花の紅なる有り、而今再び到る花の紅なる處、花は舊時紅なる處に在りて紅なり、家は閩山の西復た西に在り、其中歲々鶯の啼く有り、而今再び到る鶯の啼く處、鶯は舊時の啼く處に在つて啼く、此れ翁の本く所、其の一二の句法、亦香山春深の詩を祖とす。

王漁洋の詠史小樂府二十四首、曰く小平津、曰く卿曹拜、曰く殺田豐、曰く戮魏親、曰く赦雍齒、曰く丹陽婦、曰く卿慙長、曰く寄當歸、曰く借荊州と、山陽の日本樂府の題目は之れに倣ふ。

張橫渠曰く、人多く言ふ、貧賤に安すと、其の實は、只だ是れ計窮し力屈し、才短にして、營畫すること能はざるのみ、若し稍、動き得ば、恐くは未だ肯て之れに安んぜずと

之、今世言安貧者、皆此類也。

東坡云、僕初入廬山、是日有以陳令舉廬山記見寄者、且行且讀、見其中云、徐凝李白之詩不覺失笑、旋入開先寺、主僧求詩、因作一絕云、帝遣銀河一派垂、古來惟有謫仙辭、飛流濺沫知多少、不與徐凝洗惡詩、按李白望廬山瀑布水詩、挂流三百丈、又云、流沫拂穹石、第三句用此、古人雖副急之作、不容易下筆也。

李遠字萬歲、嘗校獵於莎柵、見石於叢薄中、以爲伏兔、射之而中、鏃入寸餘、就而視之、乃石也、此李廣射虎後一人也。

韓果字阿六、從大軍破稽胡於北山、胡地險阻、人迹罕至、果進兵窮討散、其種落稽胡憚、

今の世、貧に安ずと言ふ者は、皆此の類なり。

東坡云ふ、僕初めて廬山に入る、是の日、陳令舉の廬山の記を以て、寄せらるゝ者有り、且つ行き且つ讀む、其の中に、徐凝李白の詩と云ふを見て、覺えず失笑す、旋て開先寺に入る、主僧詩を求む、因りて一絶を作る、云ふ、帝遣銀河をして一派垂れしむ、古來惟だ謫仙の辭有り、飛流濺沫知んぬ多少ぞ、徐凝の與めに惡詩を洗はずと、按するに、李白の廬山瀑布水を望む詩に、流を挂く三百丈又云ふ、流沫穹石を拂ふ、第三句此れを用ふ、古人副急の作と雖ども、容易に筆を下さざるなり。

李遠字は萬歲、嘗て莎柵に校獵す、石を叢薄の中に見る、以て伏兔と爲す、之れを射て而して中る、鏃入ること寸餘、而して之れを視れば乃ち石なり、此れ李廣の虎を射る後の一人なり。

韓果字は阿六、大軍に従ひて稽胡を北山に破る、胡地險阻、人迹至ること罕なり、果、兵を進めて窮討し、其の種落を散す、稽胡、果の勁健を憚りて、號して著翅人と爲す、太

果勁健、號爲著翅人、太祖聞之笑曰、著翅之名、寧滅飛將、著翅人三字極奇。

章孝寬爲雍州刺史、先是路側一里置一土塚、經雨頽毀、每須修之、自孝寬臨州、乃勸部內、當塚處植槐代之、既免修復、又得庇蔭、本邦一里塚、蓋本于此。

歐陽公縱囚論、看破太宗好名之心、千古妙筆、周蕭僞嘗至元日、獄中所有囚繫悉放還家、聽三日然後赴獄、竝依限而至、此太宗所本。

余嘗稱赤松子、曰松子、一友人難之、然有古人既用者、蕭大圖傳、追蹤於松子。

結末之句、欲有餘意、全在其前後次第、譬如章蘇州、獨夜憶秦關、聽鐘未眠、客若作聽鐘

祖之れを聞きて笑ひて曰く、著翅の名、寧ぞ飛將に滅せんと、著翅人の三字極めて奇なり。

章孝寬、雍州の刺史と爲る、是れより先き、路側一里に、一土塚を置く、雨を経て頽毀す、毎に須らく之れを修すべし、孝寬の州に臨みしより、乃ち部内を勸し、塚處に當りて槐を植ゑて之れに代ふ、既に修復を免る、又庇蔭を得たり、本邦の一里塚、蓋し此に本づく。

歐陽公の縱囚論は、太宗の名を好むの心を看破す、千古の妙筆、周蕭僞嘗て元日に至りて獄中有る所の囚繫悉く放ちて家に還し三日にして、然る後に獄に赴くことを聽す、竝に限に依りて至る、此れ太宗の本づく所なり。

余嘗て赤松子を稱して松子と曰ふ、一友人之れを難す、然れども、古人既に用ふる者有り、蕭大圖の傳に、松子に追蹤すと。

結末の句、餘意有らんを欲す、全く其前後の次第に在り、譬へば、章蘇州の、獨夜秦關を憶ふ、鐘を聽いて未だ眠らざるの客の如き、若し、鐘を聽いて未だ眠らざるの客、獨

未眠客、獨夜憶秦關、更有何味。

姚合詩云、晚來山鳥鬧、雨過杏花稀、比李嘉祐、清明桑葉少、穀雨杏花稀、更高一籌、放翁詩云、小樓一夜聽春雨、深巷明朝賣杏花、亦佳。

俞文豹曰、看人文字、須平心定氣、反覆推詳、豈可輕下雌黃、余每推敲社友詩、以此語爲龜鑑。

朱舜水曰、今人不善學佛、舍卻腔子裡眞佛、反去外面尋佛、或曰眞佛如何供養、曰不用香花燈燭、止須兩字眞誠、余亦下一轉語曰、今人不善學道、舍卻腔子裡正道、反去外面尋道、或曰正道如何修行、曰不用浮華文字、止須兩字眞誠。

夜秦關を憶ふに作らば、更に何の味か有らん。

姚合の詩に云ふ、晚來山鳥鬧し、雨過ぎて杏花稀なり」と、李嘉祐の、清明桑葉少に、穀雨杏花稀なり」に比すれば、更に高きこと一籌、放翁の詩に云ふ、小樓一夜春雨を聽く、深巷明朝杏花を賣るも亦佳なり。

俞文豹曰く、人の文字を見る、須らく平心定氣、反覆推詳すべし、豈に輕しく雌黃を下す可けんやと、余毎に社友の詩を推敲す、此の語を以て龜鑑となす。

朱舜水曰く、今人善く佛を學ばず、腔子裡の眞佛を舍卻し、反りて去りて外面に佛を尋ねと、或ひと曰く、眞佛は如何ぞ供養せん、曰く、香花燈燭を用ひず、止だ兩字の眞誠を須とふ、余も亦、一轉語を下して曰く、今人善く道を學ばず、腔子裡の正道を舍卻し、反りて去りて外面に道を尋ねを用と、或ひと曰く、正道は如何ぞ修行せん、曰く、浮華の文字ひず、止だ兩字の眞誠を須ふと。

陳簡齋春日詩云、朝來庭樹有鳴禽、紅綠扶春上、遠林忽有好詩生、眼底安排句法已難尋、余謂轉結二句善盡詩人情狀、然非苦吟之徒不能知之、又對酒詩云、新詩滿眼不能裁、鳥度雲移落酒盃、此亦同意、范仲立畫工山水得荆浩關仝之妙、既而歎曰、師人不善、師二造化、詩畫雖二途、其妙解一也。

馮道詩云、口是禍之門、舌是斬身刀、閉口深藏舌、安身處處牢、此語雖俚、實修身至要也、唐詩、西原驛路挂城頭、挂字新奇、錢大昕詩、清流出雲外、古寺桂林梢、祖此。

余性多病、數瀕于死、然於死生之際、毫不動心、竊有得於前賢之言焉、論語曰、死生有命、孟子曰、壽夭不貳、修身以俟之、所以立命也、又曰、莫非命也、順受其正、是故知命者、不立

陳簡齋の春日の詩に云ふ、朝來庭樹鳴禽有り、紅綠春を扶けて遠林に上す、忽ち好詩の眼底に生ずる有り、句法を安排して已に尋ね難し、余謂ふ、轉結の二句、善く詩人の情狀を盡す、然れども、苦吟の徒に非ざれば、之れを知ること能はず、又、酒に對する詩に云ふ、新詩滿眼裁する能はず、鳥度り雲移りて酒盃に落つ、此れ亦同意、范仲立の畫、山水に工なり、荆浩關仝の妙を得たり、既にして歎じて曰く、人を師とするは、造化を師とするに若かずと、詩畫二途と雖ども、其の妙解は一なり。

馮道の詩に云ふ、口は是れ禍の門、舌は是れ身を斬るの刀、口を閉ぢて深く舌を藏せば、身を安じて處々に牢し、此語俚と雖ども、實に修身の至要なり。

唐詩に、西原の驛路城頭に挂ると、挂の字新奇なり、錢大昕の詩に、清流、雲外に出で、古寺、桂林梢に挂るは、此を祖とす。

余性多病、數死に瀕す、然れども、死生の際に於て、毫も心を動さず、竊に前賢の言に得る有り、論語に曰く、死生命有り、孟子に曰く、壽夭不貳、身を修めて以て之れを俟つ、命を立つる所以なり、又曰く、命に非ざるは莫きなり、順ひて其の正を受く、是の故に、命を知る者は、巖牆の下

乎巖墻之下、荀子曰、相命已定、鬼神不移、又曰、生人之始也、死人之終也、始終俱善、人道畢矣。

余壯年託苧栗齋、刻韓文公餘事作詩人句、以爲引首印、年過五十、毫無所成、然讀書工夫、老而益壯、文公詩、吾老著讀書、餘事不挂眼、欲取此句、更刻一印、恨無鐵筆如栗齋者、栗齋名彝、字名六、潛心古印、旁善書畫、一日與諸子會于中山精舍、古森厚保携一石材、請揮鐵筆、栗齋戲於懷中、彫水月觀三字、出而示衆、滿座驚嘆、蓋其運刀之妙、心手相應、不假目力、字畫分明、安排極佳、茲摹印文以

存典型。



陸次雲洞溪織志、風鬼出黔中、無形無影、能

に立たず、荀子曰く、相命に已定る、鬼神移らず、又曰く、生は人の始なり、死は人の終なり、始終俱に善くして、人道畢れり。

余壯年苧栗齋に託して、韓文公の餘事詩人と作るの句を刻せしめ、以て引首印と爲す、年五十を過ぎ、毫も成る所無し、然れども、讀書の工夫は、老ひて益壯なり、文公の詩に「吾れ老ひて書を讀むに著す、餘事眼に挂けず」と、此の句を取りて、更に一印を刻せんと欲す、恨むらくは、鐵筆、栗齋の如き者無きを、栗齋名は彝、字は名六、心を古印に潛め、旁ら書畫を善くす、一日、諸子と中山精舍に會す、古森厚保、一石材を携へて、鐵筆を揮はんことを請ふ、栗齋戲に懷中に於て、水月觀の三字を彫り出して衆に示す、滿座驚嘆す、蓋し其の運刀の妙、心手相應す、目力を假らず、字畫分明、安排極めて佳なり、茲に印文を摹して以て典型と存す。

陸次雲の洞溪織志に、風鬼黔中に出づ、影無く形無く、以て風を旋て人を攝す、吾が邦の稱する所の加麻伊太知

以旋風播人、吾邦所稱、加麻伊太知之類。

西鄰某氏築牆侵余園中、余欲正之、竊謂我失尺土無缺于事、彼得之如拓境、若捍言不謝罪、則不得不訴于官、祇攬吾方寸地耳、遂默而止、楊玲批于弟理舊居狀云、四鄰侵我好從伊、畢竟須思未有時、試上含元殿基望、秋風秋草正離離、善與惡意符矣。

吾勢有二鸚鵡石、一在宮川上游、一在磯部山中、土人以其應人語、稱曰鸚鵡、卽響石也、宮川上游之石最響、東涯翁有紀行、雲林石譜所載、鸚鵡石、以其色淺綠名之、名同而實異、近世茶事盛行、每月定日互招賓客、可稱湯社、清異錄和凝在朝、同列遞日以茶相飲、味劣者有罰、號爲湯社。

按舊本無
名同之名
字今補

の類なり。
西鄰の某氏、牆を築きて余の園中を侵す、余之れを正さんと欲す、竊に謂ふ、我れ尺土を失ふも、事を缺ぐこと無し、彼れ之れを得れば、境を拓くが如し、若し捍言して罪を謝せざれば、則ち官に訴へざるを得ず、祇に吾方寸の地を攬るのみと、遂に黙して止みぬ、楊玲弟の舊居を理する狀に批して云ふ、四鄰我を侵す、好し伊れに従へ、畢竟須らく思ふべし、未だ有らざりし時を、試に含元殿の基に上りて望め、秋風秋草正に離々」と、善く惡意と符せり。
吾が勢に、二つの鸚鵡石あり、一は宮川の上流に在り、一は磯部山中に在り、土人、其の人語に應ずるを以て、稱して鸚鵡と曰ふ、卽ち響石なり、宮川の上流の石最も響す、東涯翁に紀行有り、雲林石譜に載する所の鸚鵡石は、其の色淺綠なるを以て之れを名づく、名同じく而して實は異なり。

近世茶事盛んに行はる、毎月、日を定めて、互に賓客を招く、湯社と稱すべし、清異錄に、和凝朝に在り、同列日を遞して茶を以て相飲す、味劣なる者は罰あり、號して湯社と爲す。

樂府雜錄善歌必先調其氣，氣氤自臍出，至喉乃噫，其詞即分抗墜之音，既得其術，即可致遏雲擗谷之妙也。按盧照鄰詩云：清歌一轉口，氤氳亦此意也。

侯鯖錄：世之嫁女三日送食，俗謂之煖女。廣韻中正有此說，使饌字，邦人娶婦，親戚朋友各贈布帛酒肉，以充賀儀，更以餅糕慰問新婦，此亦煖女之意。煖有溫存之義，與煖房之煖同。

溺器一名虎子，不詳其義。侯鯖錄云：李廣與兄弟獵於宜山之北，見臥虎焉，射之，一矢即斃，斷其頭爲枕，示服猛也。鑄銅象其形爲洩器，示能辱之也。至今洩器謂之虎子，或爲虎枕，此說頗覺附會，錄質博雅。

樂府雜錄に善歌は必ず先づ其の氣を調す、氣氤臍より出で、喉に至り、乃ち其の詞を噫し、即ち抗墜の音を分つ、既に其の術を得れば、即ち遏雲擗谷の妙を致す可しと按するに、盧照鄰の詩に云ふ、清歌一轉口氤氳と、亦此の意なり。

侯鯖錄に、世の女を嫁する、三日食を送る、俗に之れを煖女と謂ふ、廣韻中、正に此の説有り、饌の字を使ふ、邦人婦を娶る、親戚朋友、各布帛酒肉を贈りて、以て賀儀に充つ、更に餅糕を以て、新婦を慰問す、是れも亦煖女の意なり、煖に溫存の義有り、煖房の煖と同じ。

溺器一名は虎子、其の義を詳にせず、侯鯖錄に云ふ、李廣、兄弟と宜山の北に獵す、臥虎を見て、之れを射る、一矢即ち斃る、其の頭を斷ちて枕と爲す、猛を、するを示すなり、銅を鑄て其の形に象り、洩器と爲す、能く之れを辱むるを示すなり、今に至りて、洩器之れを虎子と謂ふ、或は虎枕と爲すと、此の説、頗る、附會を覺ゆ、錄して博雅に質

過庭錄、陽翟燕照鄰仲明賢士人也、素安命、生計索然、讀書不仕、嘗有詩云、女矮兒痴十口餘、進時無業退無慮、一窓風雪韓城夜、火冷燈青照舊書、第三四句善寫貧家光景、餘情溢於言外。

多病愛閑語出南史王儉傳、余欲築一茆亭、名曰愛閑、未果、白香山詩、經忙始愛閑、杜牧之詩、愛閑能有幾人來、是皆得閑中趣者、如劉賓客、功成卻愛閑、固非吾儕所當也。

明道雜誌、古人作詩賦事、不必皆實、如謝宣城、澄江淨如練、宣城去江近、百里州治左右無江、但有兩溪耳、或當時謂溪爲江、亦未可知也、入蜀記、竹樓下稍東、卽赤壁磯、亦茆岡爾、略無草木、故韓子蒼詩云、豈有危巢與栖

す過庭錄に、陽翟の燕照鄰仲明は、賢士人なり、素と命に安んず、生計索然たり、書を讀みて仕へず、嘗て詩有り云ふ、女矮兒痴十口餘、進む時業無く退いて慮無し、一窓の風雪韓城の夜、火冷に青くして舊書を照す、第三四句、善く貧家の光景を寫す、餘情言外に溢る。

多病閑を愛するの語は、南史の王儉傳に出づ、余、一茆亭を築きて、名づけて愛閑と曰はんと欲す、未だ果さず、白香山の詩に、忙を経て始めて閑を愛す、杜牧の詩に、閑を愛す能く幾人有りて來る、是れ皆閑中の趣を得る者、劉賓客の「功成つて卻つて閑を愛す」の如きは、固より吾が儕の當る所に非ざるなり。

明道雜誌に、古人詩を作り事を賦す、必ずしも皆實ならず、謝宣城の「澄江淨くして練の如し」の如き、宣城は江を去ること百里に近し、州治の左右に江無し、但だ兩溪有るのみ、或は當時溪を謂ひて江と爲すも、亦未だ知るべからざるなり、入蜀記に、竹樓の下稍東すれば、卽ち赤壁磯、亦茆岡のみ、略、草木無し、故に韓子蒼の詩に云ふ、豈に危巢と栖鶴と有らんや、亦陳迹無く但だ飛鷗」と、此磯、圖

鶻亦無陳迹但飛鷗此磯圖經及傳者皆以爲周公瑾敗曹操之地然江上多此名不可考質按謝蘇二公文字後世足以考信而宣城無江赤壁無草木六朝逸矣姑置不論放翁去北宋不甚相遠其所親見如此抑亦南渡之後陵谷一變使然耶所謂事不皆實似非誣也。

焦氏筆乘茄子根煎湯浴足能治竈瘰竈瘰足跟凍瘡也余幼時每冬患凍瘡曾祖母探雪下紅燒成霜傅之即愈。

宋白咏石燭詩云但喜明如蠟何嫌色似璧石燭卽石炭也本草琥珀千年者爲璧狀似玄玉黑如純漆。

或問古人字用甫字余嘗閱一書名失云表德

經及び傳ふる者皆鶻て周公瑾の曹操を敗るの地と爲す然れども江上に此の名多し考質すべからず按ずるに謝蘇二公の文字後世以て信を考ふるに足る而して宣城に江無く赤壁に草木無し六朝は逸たり姑く置きて論ぜず放翁北宋を去ること甚だ相遠からず其の親しく見る所此くの如し抑も亦南渡の後陵谷一變し然らしむるか謂はゆる事實ならずと疑ふるに非ざるに似たり。

焦氏筆乘に茄子根煎湯浴すれば能く竈瘰を治するに足れりと竈瘰は足跟の凍瘡なり余幼時冬毎に凍瘡を患ふ曾祖母雪下紅を採りて燒きて霜と成し之れを傅く即ち愈ゆ。

宋白石燭を咏する詩に云ふ但だ喜ぶ明蠟の如し何ぞ嫌はん色璧に似たるをと石燭は即ち石炭なり本草に琥珀千年の者を璧と爲す狀玄玉に似たり黒きこと純漆の如し。

或ひと古人の字に甫の字を用ふるを問ふ余嘗て一

用甫字者起自荆公、當時附勢者多效之、故有表德皆連甫、花書盡帶圈之說、然甫字亦止用於字內、後人於字之下復用一甫字、或換寫作父字、其義固通、但亦是畫蛇添足之誚云、按王介甫初字介卿、王深甫集有臨河寄介卿詩、曹南豐集亦有寄王介卿詩、甫云卿云、固無意義、老學庵筆記、錢繩字穆、范祖禹字淳、皆一字、交友以其難呼、故增父字、非其本也、今人字曰某某甫、實蛇足也、

陳無已云、世人以癡爲九百、謂其精神不足也、今人罵不中用者、謂不足百、蓋以長錢稱之也。

晁無咎、新城遊北山記、仰看星斗、皆光大如適在人上、杜子美僅以七字盡之、云、仰看明

書を閲す、(失名)云ふ、表德に甫の字を用ふるは、荆公より起る、當時勢に附く者、多く之れに效ふ、故に、表德に甫字を連ね、花書盡く圈を帯ぶるの説有り、然れども、甫の字、亦字の内に用ふるに止る、後人、字の下に於て、復た一の甫の字を用ふ、或は換寫して父の字に作る、其の義固より通ず、但だ亦是れ蛇を畫きて足を添ふるの誚りと云ふ、按するに、王介甫、初の字は介卿、王深甫の集に、臨河に介卿に寄するの詩あり、曹南豐の集にも、亦、王介卿に寄するの詩あり、甫と云ひ卿と云ふ、固より、意義無し、老學庵筆記に、錢繩字は穆、范祖禹字は淳、皆一字、交友其の呼び難きを以ての故に父の字を増す、其の本に非ざるなり、今人字して某某甫と曰ふは、實に蛇足なり。

陳無已云ふ、世人、癡を以て九百と爲す、其の精神の足らざるを謂ふなり、今人、川に中らざる者を罵りて、不足百と謂ふ、蓋し長錢を以て之れを稱するなり。

晁無咎の新城北山に遊ぶ記に、仰ぎて星斗を看れば、皆光大にして、適に人上に在るが如しと、杜子美は、僅に七字を以て之れを盡して云ふ、仰ぎ看る明星空に當つて大

星營空大。

絶句起用通韻例多、又有第二句用者、賈長江詩、破卻千家作一池、不栽桃李種薔薇、薔薇花落秋風後、荆棘滿庭君始知、杜牧詩、自是尋春去較遲、不須惆悵怨芳菲、狂風落盡深紅色、綠葉成陰子滿枝。

說詩碎語、張平子歸田賦云、仲春令月、時和氣清、原隰鬱茂、百草滋榮、明指二月、謝詩、首夏猶清和、言時序四月、猶餘二月景象、故下云、芳草亦未歇、自後人誤讀謝詩、有四月清和雨乍晴句、相沿到今、賢者不免矣、試思猶字竟作何解、按何遜詩、麥氣始清和、是指首夏、四月清和、司馬公句、要之清和二字、春夏通用、不必本歸田賦也。

なりと。

絶句は、起に通韻を用ふる例多し、又第二句に用ふる者あり、賈長江の詩に「千家を破卻して一池を作る、桃李を栽えず薔薇を種う、薔薇花落つ秋風の後、荆棘庭に満ちて君始めて知らん」と、杜牧の詩に「自らはれ春を尋ねて去ること較遅し、惆悵して芳を怨むことを須ひず、狂風、深紅の色を落盡し、綠葉陰を成して子枝に滿つ」。

說詩碎語に、張平子の歸田賦に云ふ、仲春令月時和し氣清く、原隰鬱茂し、百草滋榮すと、明に二月を指す、謝が詩に「首夏猶清和」と、言ふは時序四月、猶二月の景象を餘すと、故に下に云ふ「芳草亦未だ歇まず」と、後人謝の詩を誤讀してより、四月清和雨乍晴るの句あり、相沿て今に到る賢者すら免れず、試に思へ、猶の字竟に何の解を作すと、按ずるに、何遜の詩に「麥氣始めて清和」と、是れ首夏を指す、四月清和は、司馬公の句、之れを要するに、清和の二字は、春夏に通用す、必ずしも歸田賦に本づかさるなり。

木世肅高雄山詩云、文覺杜多本在家、袈裟斬後著袈裟、于今血染溪山樹、彷彿紅楓二月花、時人傳賞以爲合作、此剽竊之甚者、蓉塘詩話、一士人題雁來紅畫曰、漢使傳書託便鴻、上林一箭墮西風、至今血染階前草、一度秋來一度紅。

才力不凡、足以睥睨一世、譬有山陽之才、而有山陽之詩、無其才而學其詩、遂不免叫囂之弊耳、乳臭書生、不辨菽麥、好作大聲壯語、曾蒼山序唐絕句曰、執偉豪而棄淵深、此近來選詩者之偏也、漫齋語錄、詩用意要清深、下語要平淡、二子具慧眼者、實詩中三昧語、顧英題自畫小像云、儒衣僧帽道人鞋、到處青山骨可埋、還憶少年豪俠興、五陵裘馬洛

木世肅の高雄山の詩に云ふ、文覺杜多本、家に在り、袈裟斬りて後袈裟を著く、今に血は染む、溪山の樹、彷彿たり紅楓、二月の花、時人傳賞し以て合作と爲す、此れ剽竊の甚しき者、蓉塘詩話に、一士人、雁來紅の畫に題して曰く、「漢使、書を傳へて便鴻に託す、上林一箭西風に墮つ、今に至つて血は染む階前の草、一度秋來りて一度紅なり。」

才力凡ならざれば、以て一世に睥睨するに足る、譬へば、山陽の才有りて、而して山陽の詩あり、其の才無くして而して其の詩を學ば、遂に叫囂の弊を免れざるのみ、乳臭書生、菽麥を辨ぜず、好みて大聲壯語を作す、曾蒼山唐絕句に序して曰く、偉豪を執りて而して淵深を棄つ、此れ近來詩を選する者の偏なるなりと、漫齋語錄に詩は意を用ふることを清深を要す、語を下すことを平淡を要すと、二子は慧眼を具する者、實に詩中三昧の語なり。

顧英、自畫小像に題して云ふ、儒衣僧帽道人の鞋、到處の青山骨埋む可し、還つて憶ふ少年豪俠の興、五陵の裘馬洛陽の街と、一生の心事を道破し、善く險韻を用ひて、

陽街道破一生心事善用險韻而不覺其艱也源白石自題肖像云蒼顏如鐵髻如銀紫石稜稜電射人五尺小身渾是膽明時何用畫麒麟自注時奉使西上祇南海評曰此公本色余讀二詩英氣凜然襲人皆足以爲小傳矣。

一日登岳歸途出朝熊村行吟朱子濁酒三盃豪氣發朗吟飛下祝融峰之句疾如丸之走阪頃刻抵村頗不覺疲。

楊青望詩岳寺風聲起暮鐘殘陽歸去興尤濃停車欲認登臨處忘卻西南第幾峯余自熊岳歸途上回看有此景致繪不能下一句也。

沈明臣宮怨云綠滿南園桑葉肥風光欲盡

而して其の艱を覺えざるなり源白石自ら肖像に題して云ふ蒼顏鐵の如く髻銀の如し紫石稜々電人を射る五尺の小身渾て是れ膽明時何ぞ用ひむ麒麟に畫くを自注に時に使を奉じて西上すと祇南海の評に曰く此れ公の本色と余二詩を讀むに英氣凜然人を襲ふ皆以て小傳と爲すに足る。

一日岳に登り歸途朝熊村に出づ行ふ朱子の「濁酒三盃豪氣發す朗吟飛び下る祝融峰の句を吟す疾きこと丸の阪を走るが如し頃刻にして村に抵る頗る疲るゝを覺えず。

楊青望の詩に岳寺の風聲暮鐘起る殘陽歸り去つて興尤も濃なり車を停めて認めんと欲す登臨の處忘卻す西南の第幾峯と余熊岳より歸る途上に回看するに此の景致あり遂に一句を下すこと能はざるなり。

沈明臣の宮怨に云ふ綠は南園に滿ちて桑葉肥えたり

柳花飛、妾生不及吳蠶死、留得春絲上袞衣、
此自王龍標、玉顏不及寒鴉色、猶帶昭陽日
影來、化出王之比喻、出乎意表、所謂不涉理
路、不落言筌者、沈詩工而俗無餘意、白居易
七律、心
灰不及爐炭、特警
多於砌下霜、殊俚。

中說、子曰、通其變、天下無弊法、執其方、天下
無善教、故曰存乎其人、士大夫好讀書者不
可不知此意也、柳子厚詩、信書成自誤、
事漸知非、可謂實踐之語。

朱子詩云、昨夜江邊春水生、蠟燭巨艦一毛
輕、向來枉費推移力、此日中流自在行、大學
補傳所謂、至於用力之久、而一旦豁然貫通
焉、則衆物表裡精粗無不到、而吾心之全體
大用無不明矣、詩意全與此同。

錢起暮春歸故山草堂詩云、一作劉長卿詩、題
云、晚春歸山居、題

風光盡きんと欲して柳花飛ぶ、妾の生は及ばず吳蠶の死
に春絲を留め得て袞衣に上る、此れ王龍標の玉顔は及
ばず寒鴉の色、猶昭陽の日影を帯びて來るより化出す
王之比喻、意表に出づ、謂はゆる理路に涉らず、言筌に落
ちざる者、沈の詩は、工にして而して俗、餘意無し、白居易
の七律に、心灰は及ばず爐炭、鬢雪は砌下の霜よりも多
し、殊に俚なり。

中說に、子曰く、其の變に通ずれば、天下に弊法無し、其の
方を執すれば、天下に善教無し、故に曰く、其の人に存す
と、士大夫好みて書を読む者、此の意を知らざるべから
ざるなり、柳子厚の詩に、書を信じて自ら誤るを成す、事
を経て漸く非なるを知る、實踐の語と謂ふべし。

朱子の詩に云ふ、昨夜江邊春水生、蠟燭巨艦一毛輕し、
向來枉げて費す推移の力、此の日中流自在に行く、大學
補傳に謂ゆる力を用ふるの久しくして、而して一旦豁然
として貫通するに至りては、則ち衆物の表裡精粗到らざ
る無く、而して吾が心の全體大用明からならざる無し
と、詩の意、全く此れと同じ。

錢起の暮春、故山草堂に歸る詩に云ふ、(一)に劉長卿の詩

窓前、谷口春殘黃鳥稀、辛夷花盡杏花飛、始憐幽竹山窓下、不改清陰待我歸、韓退之鎮州初歸詩云、別來楊柳街頭樹、擺弄春風只欲飛、還有小園桃李在、留花不發待郎歸、二詩同意、或曰退之有情桃風柳二妓、歸途聞風柳已去、故云、蓋後人附會、不足信也、如李青蓮、白雲還自散、明月落誰家、溫飛卿、銅蟬金鴈皆零落、一曲伊州淚、萬行之類、不可枚舉、讀書之精、常在、于貧、貧則志一、無所他求、我親執袴子弟、曲藝雜伎、朝習夕廢、至其末路、往往陷於酒池肉林中、要之皆以家產有餘故也。

太上立德、其次立功、凡人無此二者、壽保百歲、不足稱也。

に作る、題して、晚春山居に歸り、窓前に題すと云ふ、谷口春殘して黃鳥稀なり、辛夷花盡きて杏花飛ぶ、始めて憐む幽竹山窓の下、清陰を改めず我が歸るを待つ、韓退之の鎮州初歸の詩に云ふ、別來楊柳街頭の樹、春風を擺弄して只だ飛ばんと欲す、還つて小園桃李の在る有り、花を留めて發かず郎の歸るを待つ、二詩同意、或は曰く、退之に情桃、風柳の二妓あり、歸途、風柳已に去ると聞く、故に云ふと、蓋、後人の附會、信するに足らざるなり、李青蓮の「白雲還つて自ら散し、明月誰が家に落つ、溫飛卿の銅蟬金雁皆零落、一曲の伊州淚萬行」の類の如き、枚舉すべからず。

書を讀むの精は、常に貧に在り、貧なれば、則ち志一にして、他に求むる所無し、我れ執袴の子弟を觀るに、曲藝雜伎、朝に習ひ夕に廢す、其の末路に至りては、往々酒池肉林の中に陷る、之れを要するに、皆家産餘有るを以ての故なり。

太上は徳を立つ、其の次は功を立つ、凡そ人、此の二つの者無ければ、壽百歲を保つとも、稱するに足らざるなり。

智猶流水、隨物屈曲、不致壅滯、義猶堤防、能殺水勢、令之順流。

弘法大師書朱雀門額、門字不勾、大師入唐之時、或傳此法、以避火厄、蓋出術者之言也、堅觚集引馬氏日抄云、門字兩戶相向、本無勾踢、宋都臨安、玉牒殿災、延及殿門、宰臣以門字有勾脚帶火筆、故招火厄、遂撤額、投火中、乃息、後書門額者、多不勾脚、我朝南京宮城門額、皆詹孟舉所書、北京大明門等額、皆朱孔易所書、門字俱無勾脚、換驚百譚、引初政、希原、書集、實門、額、門字有勾脚、太祖曰、此書賢路、削之、然則明宮城門額、不必避火厄也。換驚百譚云、中國科斗書、梵云、摩那書、又等轉書云、伽那跋多書、邦俗所稱假名真名、當是摩那伽那之略也。

智は猶ほ流水のごとく、物に随ひて屈曲し、壅滯を致さず、義は猶ほ堤防のごとく、能く水勢を殺ぎ、之れをして順流ならしむ。

弘法大師、朱雀門の額を書するに、門の字勾せず、大師入唐の時、或は此の法を傳へ、以て火厄を避くと、藝術者の言に出づるなり、堅觚集に馬氏日抄を引きて云ふ、門の字、兩戸相向ふ、本と勾踢無し、宋、臨安に都す、玉牒殿に災あり、延きて殿門に及ぶ、宰臣、門の字に、勾脚火を帯ぶるの筆有り、故に火厄を招くといふを以て、遂に額を撤して火中に投ず、乃ち息む、後門額を書する者、多く脚を勾せず、我が朝、南京の宮城の門額は、皆詹孟舉の書する所、北京の大明門等の額は、皆朱孔易の書する所、門の字俱に勾脚無し、換驚百譚に、初政記を引きて云ふ、明の太祖、登希原に命じて、集賢門の額を書せしむ、門の字に勾脚あり、太祖曰く、此れ賢路を塞ぐと、之れを削る、然らば則ち明の宮城の門額は、必ずしも火厄を避けざるなり、換驚百譚に云ふ、中國科斗の書、梵に云ふ、摩那書、又等轉書に云ふ、伽那跋多書、邦俗の稱する所の假名真名は、當に是れ摩那伽那の略なるべく。

金志章月夜登虎丘詩云、一片深宵月、明明照虎丘、松杉交影靜、蘋藻上階流、夜舫吹簫客、春燈賣酒樓、他鄉有朋好、竟夕此淹留、東坡文云、元豐六年十月十二日夜、解衣欲睡、月色入戶、欣然起行、念無與樂者、遂至承天寺、尋張懷民、亦未寢、相與步於中庭、庭下如積水空明、水中藻荇交橫、蓋竹栢影也、又月夜與客飲酒杏花下、詩云、褰衣步月踏花影、炯如流水涵青蘋、前聯蓋用此意、然詩不及文遠矣。

松南娛語、一日與客論學、余曰、夫學者者一本而已矣、而其勢不得不分也、故有王公學、有儒者學、有庶人學、能通經旨大義、明成敗興亡之理、其心正其智明、進賢退佞、邪正得

金志章の月夜虎丘に登る詩に云ふ、一片深宵の月、明明虎丘を照らす、松杉影を交へて、靜に蘋藻階に上つて流る、夜舫簫を吹く客、春燈酒を賣る樓、他郷朋好有り、竟夕此に淹留す、東坡の文に云ふ、元豐六年十月十二日の夜、衣を解きて睡らんと欲す、月色戸に入る、欣然起ちて行く、念ふに、與に樂む者無し、遂に承天寺に至り、張懷民を尋め、亦た未だ寢ねず、相與に中庭に歩す、庭下、積水空明の如し、水中に藻荇交橫す、蓋、竹栢の影なりと、又、月夜客と酒を杏花の下に飲む詩に云ふ、衣を褰げて月に歩し花影を踏む、炯として流水の青蘋を涵すが如し、と、前聯蓋此の意を用ふ、然れども、詩は文に及ばざること遠し。

松南の娛語に、一日客と學を論ず、余曰く、夫れ學は、一本のみ、而して其の勢、分れざるを得ざるなり、故に王公の學あり、儒者の學あり、庶人の學あり、能く經旨の大義に通じ、成敗興亡の理を明にし、其の心正しく、其の智明に、賢を進め佞を退け、邪正得失、瞭然として惑はず、以て萬

失瞭然不惑、以安萬邦、以調陰陽者、王公之學也、上自六經、下及子史百家之書、博涉通覽、多畜前言往行、以備顧問、下以教子弟、儒者之學也、通人倫孝悌之大義、族親和睦、拘錄疾力、以敦比事業者、庶人之學也、若使王公、徒研章句、事文辭、區區於蠹蟬之間、則吾必知其非英明之主也、使儒者枵腹寡聞、不達今古、拘拘自局、則吾必知其爲無用儒也、使庶人或縱談治亂、或耽溺文辭、則吾必知其不能守業也、是勢之不得不分也、若夫上下尊卑各得其宜、秩然不紊者、聖人之道也、是學之所以一本也、松南此文、實讀書家之至要也、余亦嘗有一絕云、天子諸侯卿大夫、士農工賈及醫巫、人人學問須知分、一據談

邦を安んじ以て陰陽を調ふるは、王公の學なり、上は六經より下は子史百家の書に及び、博涉通覽、多く前言往行を畜へて以て顧問に備へ下は以て子弟に教ふるは儒者の學なり、人倫孝悌の大義に通じ、族親和睦、拘錄疾力、以て事業を敦比するは、庶人の學なり、若し王公をして、徒に章句を研ぎ、文辭を事とし、蠹蟬の間に區々たらしめば、則ち吾れ必ず其の英明の主に非ざるを知るなり、儒者をして、枵腹寡聞、今古に達せず、拘々自ら局せしめば、則ち吾れ必ず其の無用の儒たるを知るなり、庶人をして、或は治亂を縱談し、或は文辭に耽溺せしめば、則ち吾れ必ず其の業を守る能はざるを知るなり、是れ勢の分れざるを得ざるなり、若し夫れ上下尊卑、各其の宜しきを得て、秩然として紊れざるは、聖人の道なり、是れ學の一本なる所以なりと、松南の此の文實に讀書家の至要なり、余亦嘗て一絶あり、云ふ、天子諸侯卿大夫、士農工賈及び醫巫、人々學問須らく分を知るべし、一據に經を談するは是れ腐儒。

經是腐儒。

松南曰、讀書有三患、務博而無要者一患也、著眼於字句遺大義者一患也、棄正義而求新奇者一患也、有此三患、雖著等身之書、非聖賢讀書之本意也、余觀近世學者、免此三患者殆希。

朱排山咏始皇云、詩書何苦遭焚劫、劉項都非誠字人、此祖章碣坑灰未冷山東亂、劉項元來不讀書之句、然垓下大風二歌、悲壯雄渾、壓倒千古、非區區詩人可及也。

吳冠山曰、散體文如圍棋、易學而難工、駢體文如象棋、難學而易工、余謂古詩如圍棋、近體如象棋、至其妙處、俱難下手。

揚州鼓吹詞序云、揚州明月樓、今失其處、相

松南曰、讀書に三患あり、博を務めて而して要無きは、一患なり、字句に著眼して、大義を遺すは、一患なり、正義を棄て、而して新奇を求むるは、一患なり、此の三患有らば、等身の書を著すと雖ども、聖賢讀書の本意に非ざるなり、余、近世の學者を觀るに、此の三患を免る者、殆んど希なり。

朱排山、始皇を詠じて云ふ、詩書何を苦んで焚劫に遭はしむ、劉項都て字を諱る人に非ずと、此れ章碣の「坑灰未だ冷かならずして山東亂る、劉項元來書を讀まず」の句を祖とす、然れども、垓下大風の二歌、悲壯雄渾、千古を壓倒す、區々詩人の及ぶべきに非ざるなり。

吳冠山曰く、散體の文は圍棋の如し、學び易くして工なり難し、駢體の文は象棋の如し、學び難くして工なり易しと、余謂ふ、古詩は圍棋の如し、近體は象棋の如し、其の妙處に至りては、俱に手を下し難し。

揚州鼓吹詞の序に云ふ、揚州の明月樓、今其の處を失す

傳、元時富室趙氏、建以延客、一時題咏甚多、皆未愜意、趙子昂偶至、廣陵主人延之、卽席題云、春風閨苑三千客、明月揚州第一樓、趙大喜、徹酒斝爲壽、至今傳爲勝事、按平安東山第一樓、取釋六如佳麗東山第一樓句名之、六如本子子昂、不免生吞活剝之謗、吾鄉花月樓、先輩名曰長峯第一樓、腐套可厭。

頃有示明益王書章莊詩全幅者、字雜草行、筆力遒勁、詩云、近來中酒起常遲、臥看南山改舊詩、開戶日高春寂寞、數聲啼鳥上花枝、欸云、益藩仙源道人、下有朱字印文、曰益王之印。

余獲三百年前屋上竹材、以造線香筒若干、寄贈友人、各有所題、自二字至七字、語盡閑

韻雨亭隨筆卷下

相傳、元の時富室趙氏、建て、以て客を延く、一時題詠甚だ多し、皆未だ意に愜はず、趙子昂偶、廣陵に至る、主人之れを延く、卽席に題して云ふ、春風閨苑三千の客、明月揚州第一の樓と、趙大に喜び酒斝を徹して壽を爲す、今に至るまで傳へて勝事と爲すと、按するに、平安の東山第一樓は、釋六如の佳麗東山第一樓の句に取りて之れに名づく、六如は子昂に本づく、生吞活剝の謗を免れず、吾が郷の花月樓は、先輩名づけて長峯第一樓と曰ふ、腐套厭ふべし。

頃明の益王の書せる章莊の詩の全幅を示す者あり、字は草行を雜ふ、筆力遒勁、詩に云ふ、近來酒に中てられて起ること常に遲し、臥して南山を看て舊詩を改む、戸を開けば日高くして春寂寞、數聲の啼鳥花枝に上ると、欸に云ふ、益藩仙源道人と、下に、朱字の印文ありて、益王の印と曰ふ。

余、三百年前の屋上の竹材を獲て、以て線香筒若干を造り、友人に寄贈す、各題する所有り、二字より七字に至る、語盡きて筆を閑す、偶趙篔の詩を見る、古鼎燒殘して

二二

筆偶見趙彥佐詩、古鼎燒殘心字香、困來攜枕臥藤牀、一聲啼鳥破幽夢、花影滿簾春晝長、注閩商貨香、以心字爲號、取杜甫、心清聞妙香之義、他日又有請者、欲以此末句及心清二字題之。

西村子贊家在蓋松山之麓、就山開園、園中有菊雪岡東望蕭岳於雲際、養庵紅藥塢、楓磴之勝、花時招客、盛供數日、實爲吾鄉園林之冠、近年家計不振、風物蕭條、竊感榮枯之無定。

竹坡仲秋後一夕、白雲亭小集詩云、不唯看月好、靈岳聳林東、萬象迎新養、孤光溢碧空、養和凌世險、引滿慰途窮、願罷絃歌去、銀笙弄快風、時御巫氏在、菜花亭來與余輩同酌、吹笙又遊三田山、一聯頗佳、殘暉翻冷蝶、杏

心字香し、困來枕を攜へて藤牀に臥す、一聲の啼鳥幽夢を破る、花影靡に満ちて春晝長し、注に閩商香を貨するに、心の字を以て號と爲す、杜甫の「心清くして妙香を聞く」の義に取ると、他日、又請ふ者あらば、此の末句及び心清の二字を以て、之れに題せんと欲す。

西村子贊の家は、蓋松山の麓に在り、山に就きて園を開く、園中に、菊雪岡(東望蕭岳を雲際に望む)養庵紅藥塢、楓磴の勝あり、花時客を招きて、盛供數日、實に吾が郷園林の冠たり、近年、家計振はず、風物蕭條、竊に榮枯の定り無きに感ず。

竹坡仲秋後一夕、白雲亭小集の詩に云ふ、唯だ月を見るの好きのみならず、靈岳林東に聳ゆ、萬象新養を迎へ、孤光碧空に溢る、和を養ふて世險を凌ぎ、滿を引いて途窮を慰む、願くは絃歌を罷め去つて、銀笙快風に弄せんと、時に御巫氏、菜花亭に在り、來りて余輩と同じく酌み、笙を吹く、又三田山に遊ぶ一聯、頗る佳なり、殘暉冷蝶翻り、香蠶歸禽を失すと、竹坡名は昌言、字は子贊、吾が黨

靄失歸禽、竹坡名昌言、字子贊、吾黨一畏友也。

世間所傳、薩天錫天滿宮詩云、無常說法現神通、千里飛梅一夜松、萬事夢醒山吐月、觀音寺裡一聲鐘、格調凡劣、複用一字、始余譴之、疑非薩詩、後閱全集、絕無此篇、益信管見不誤、羅山隨筆、世傳、耆相公遭譖之西州也、作詩曰、離家三箇月、落淚百千行、萬事皆如夢、時時仰彼蒼、此則唐杜甫之作、而公亦偶同耳、按第三句用此、洪序亦有詩云、日本會聞北野君、愛梅瀟洒又能文、謫居西府三千里、一夜飛香度海雲、二詩皆非佳作、日本云云、拙甚、要之邦人假託、不過侈言相公威靈耳、宋景濂賞櫻、日本盛於唐、一首傳爲日東

の一畏友なり。

世間傳ふる所の薩天錫の天滿宮の詩に云ふ、無常說法現に神通千里の飛梅一夜の松萬事夢醒めて山月を吐く、觀音寺裡一聲の鐘と、格調凡劣、一の字を複用す、始め余これ誦して、薩の詩に非ざるを疑ふ、後に全集を閲するに、絶えて此の篇無し、益管見の誤らざるを信ず、羅山隨筆に、世に傳ふ、耆相公の謫に遭ひて西州に之くや、詩を作りて曰く、家を離る三箇月、涙を落す百千行、萬事皆夢の如し、時々彼蒼を仰ぐ、此れ則ち唐の杜甫の作、而して公亦偶同じきのみ、按するに、第三句、此れを用ふ、洪序も亦詩あり云ふ、日本會て聞く北野君、梅を愛して瀟洒又文を能くす、西府に謫居す三千里、一夜飛香海雲を度る、二詩皆佳作に非ず、日本云々は拙甚し、之れを要するに、邦人の假託、相公の妙靈を侈言するに過ぎざるのみ、宋景濂の櫻を賞するは日本、唐よりも盛なりといふ一首、傳へて日東曲の一と爲す、本集に載せず、是れ亦同一

曲之一、本集不載是亦同一伎倆、令人捧腹、又詹仲和題雪舟畫富士峯圖詩出、換鴛百譚亦不甚佳。

祇南海曰、昔日予與諸子遊長樂亭賦一絕云、綠樹陰濃小院涼、不須避暑屢移牀、爛柯日月須臾事、何若林間午景長、後閱列朝集、張以寧爛柯山詩、人說仙家日月遲、仙家日月轉堪悲、誰將百歲人間事、只換山中一局棊、古人既有與予同見解者、南海平平說著、不如張詩精練句法極工。

十國春秋、劉乙字子真、棄官隱鳳山、有句云、掃石雲隨帚、耕山鳥怕人、嘗乘醉與人爭妓、既醒慚悔、集以酒致失者、爲百悔經、不飲至於終身、按雅言雜載、陳沅閑居云、掃地雲粘

の伎倆、人をして捧腹せしむ、又詹仲和の雪舟の畫ける富士峯の圖に題する詩は、換鴛百譚に出づ、亦甚だ佳ならず。

二一四

祇南海曰く、昔日、予、諸子と、長樂亭に遊び、一絶を賦して云ふ、綠樹陰濃にして、小院涼し、須ひず暑を避けて、屢牀を移すを、爛柯日月須臾の事、何ぞ若かん林間午景の長きにと、後に、列朝集を閲するに、張以寧の爛柯山の詩に「人は説く仙家日月遲しと、仙家の日月轉、悲むに堪へたり、誰か百歲人間の事を將て、只だ換ふ山中一局の棊と、古人既に予と見解を同じくする者あり、南海、平々に説著す、張の詩の精練、句法極めて工なるに如かず。

十國春秋に、劉乙字は子真、官を棄て、鳳山に隱る、句有り云ふ、石を掃へば雲、帚に隨ひ、山に耕せば鳥、人を怕る、と嘗て醉に乘じ人と妓を争ふ、既に醒めて慚悔す、酒を以て失を致す者を集めて、百悔經を爲る、飲せずして身を終るに至る、按ずるに、雅言雜載に、陳沅の閑居に云ふ、地を掃へば雲、帚に粘し、山に耕せば鳥、牛を怕る、二聯、

帝耕山鳥怕牛、二聯不知孰先、劉詩稍優。

世以文字亡身者有、破家者有、豈曾惑溺酒色、此等之人、尙稱好學、何不思之甚也。

毛先舒吳宮詞云、蘇臺月出夜烏棲、宴罷吳王醉似泥、別有深恩酬不得、向君歌舞背君啼、善得詩人之旨、朱受新亦云、夜擁笙歌百尺臺、太湖月落宴還開、君王自愛傾城色、忘卻人從敵國來、筋骨大露、乏溫柔氣、比之前詩、談非同日。

余頃爲塾生、講近思錄、話次及邵子數學、頗覺其妄、然未容易發之於口、偶讀錢大昕詩云、大易言天地、其道最恆久、覆載靡不用、高明而博厚、隸首善布算、算得天地壽、異哉安樂翁、吊詭惑黔首、十三萬爲期、混沌歸无有、

孰か先なるを知らず、劉の詩稍優る。

世に文字を以て身を亡す者あり、家を破る者あり、豈に嘗だ酒色に惑溺するのみならんや、此れ等の人尙ほ學を好むと稱す、何ぞ思はざるの甚しきや。

毛先舒の吳宮詞に云ふ、蘇臺月出で、夜烏棲む、宴罷んで吳王醉ふて泥に似たり、別に深恩の酬い得ざる有り、君に向つて歌舞し君に背いて啼く、善く詩人の旨を得たり、朱受新も亦云ふ、夜、笙歌を擁す百尺の臺、太湖月落ちて宴還た開く、君王自ら傾城の色を愛し、忘卻す人の敵國従り來るを、筋骨大に露る、溫柔の氣に乏し、之れを前詩に比するに、談、同日に非ず。

余頃塾生の爲に近思錄を講ず、話次、邵子の數學に及ぶ、頗る其の妄を覺ゆ、然れども、未だ容易に之れを口より發せず、偶、錢大昕の詩を讀むに云ふ、大易天地を言ふ、其の道最も恆久、覆載用ひざる靡し、高明にして博厚、隸首善く算を布く、算し得たり天地の壽、異なる哉、安樂翁、吊詭黔首を惑はす、十三萬を期と爲し、混沌无有に歸す、消耗成亥に終り、開闢子丑に啓く、唐虞午運に當り、民物故

消耗終成亥、開闢啓子丑、唐虞當午運、民物故繁阜、更歷三萬年、人縮如鷄狗、我欲問安樂、此語誰所受、太空了無言、紀述自誰某、誰從混沌前、親見混沌後、瞿曇譚劫數、認悠本無取、奈何拾餘唾、欲與義文偶、向之所疑渙然冰釋、此等之詩、有益後學。

歐陽公玉樓春云、兩翁相遇逢佳節、正值柳綿飛似雪、遇逢值三字、下得各至當。

漁隱云、浩然夜歸鹿門寺、歌云、山寺鳴鐘晝已昏、魚梁渡頭爭渡喧、岑參、巴南舟中夜事詩云、渡口欲黃昏、歸人爭渡喧、岑詩語簡而意盡、優於孟也。

東坡曰、王彭嘗云、塗巷中小兒薄劣、其家所厭苦、輒與錢令聚坐說古話、至說三國事、聞

に繁阜、更に三萬年を経て、人縮まりて鷄狗の如し、我れ安樂に問はんと欲す、此の語誰に受かくる所ぞ、太空了に言無し、紀述誰某よりす、誰か混沌の前より、親しく混沌の後を見る、瞿曇劫數を譚ず、認悠本と取る無し、奈何ぞ餘唾を拾ひ、義文と偶せんと欲す、と、向きの疑ふ所、渙然として冰釋す、此れ等の詩、後學に益有り。

歐陽公の玉樓春に云ふ、兩翁相遇ふて佳節に逢ふ、正に柳綿の飛んで雪に似たるに値ふ、遇逢値の三字、下し得て各至當なり。

漁隱に云ふ、浩然の夜鹿門寺に歸る歌に云ふ、山寺の鳴鐘晝已に昏し、魚梁渡頭に渡を争ふて喧し、岑參の巴南舟中夜事の詩に云ふ、渡口黃昏ならんと欲す、婦人渡を争ふて喧し、岑の詩は、語簡にして而して意盡く、孟より優れり。

東坡曰く、王彭嘗て云ふ、塗巷中の小兒薄劣、其の家の厭苦する所、輒ち錢を與へて聚坐して古話を説かしむ、三國の事を説くに至りて劉玄德の敗を聞き、擊墜して涕を

劉玄德敗、嬰燈有出涕者、聞曹操敗、即喜唱快、以是知君子小人之澤、百世不斬、吾邦演野史者、說南朝事、雖五尺童、聞補氏湊川之死、莫不扼腕、蓋人心之公、和漢俱同。

余嘗與田玉溪遊、和州月瀨、宿于昆山民家、梅花數萬株、實爲天下壯觀、然在麥隴茗塢之間、絕無風致、可賞、土人唯誇其多、可發一咲、謝在杭曰、閩浙三吳之間、梅花相望、有十餘里不絕者、然皆俗人種之、以售其實耳、花時苦寒、凌風雪於山谷間、豈俗子可能哉、故種者未必賞、賞者未必種、真知言哉、此遊往反十日、以詩爲務、寢食之外不接言語、各賦三十餘篇、玉溪名慎、字永圖、好詩、旁善繪事、發上野云、城南野濶、暖烟堆、月瀨何邊、可問

出す者有り、曹操の敗を聞き、即ち喜びて快を唱ふ、是を以て知る、君子小人の澤、百世斬たざるを、吾が邦、野史を演ずる者の、南朝の事を説く、五尺の童と雖、ども、補氏の湊川の死を聞き、扼腕せざるは、莫し、蓋し人心の公、和漢俱に同じ。

余嘗て田玉溪と、和州の月瀨に遊び、尾山の民家に宿す、梅花數萬株、實に天下の壯觀たり、然して麥隴茗塢の間に在り、絶えて風致の賞すべき無し、土人唯だ其の多きに誇る、一咲を發すべし、謝在杭曰く、閩浙三吳の間に、梅花相望む、十餘里絶えざる者あり、然れども、皆俗人之れを種ふ、以て其の實を售るのみ、花時苦寒、風雪を山谷の間に凌ぐ、豈に俗子能くす可けんや、故に種うる者は、未だ必ずしも賞せず、賞する者は、未だ必ずしも種えずと、真に知言なるかな、此の遊往反十日、詩を以て務と爲す、寢食の外、言語を接へず、各三十餘篇を賦す、玉溪名は慎、字は永圖、詩を好み、旁ら繪事を善くす、上野を發するに云ふ、城南野濶にして暖烟堆し、月瀨何の邊か、梅を問ふ可き、豫め占す花期、春正に半、歸樵遠く一枝を拗して來る、月瀨に到るに(三首、二を録す)梅花香裡路盤旋、水瀝

梅、豫占花期春正半、歸樵遠拗一枝來、到月
 灑、三首 梅花香裡路盤旋、水麗山明別有、天
 放、棹回看經歷處、嶺雲林霧各芬妍、攀盡梅
 林眼界除、俯看山半萬梢花、樵檐埋在香雲
 裡、借問溪村住幾家、宿尾山、四首 昨來遙入、
 白雲鄉、梅樹林間小草堂、幾片風英翻、露沼、
 新詩寫得彩箋香、發尾山途中聯句、三首 春
 山一路背梅歸、慎猶有殘香在、客衣、聚他日
 此遊應入夢、慎落花啼鳥故園扉、聚
 劉青田新春詩、昨夜東風來、吹我門前柳、柳
 芽黃未全、草根青已有、鶉鳩屋上鳴、勸我嘗
 春酒、我髮日已白、我顏日已醜、開尊聊怡情、
 誰能計身後、此詩恰似爲余言老況也、春初
 一酌、讀之悵然。

山明別に天有り、棹を放つて回看す經歷の處、嶺雲林霧
 各芬妍、梅林を攀ち盡して眼界除なり、俯して看る山半
 萬梢の花、樵檐は埋まりて香雲の裡に在り、借問す溪村
 住する幾家ぞ、尾山に宿すに、四首、一を録す、昨來遙に
 入る白雲の郷、梅樹林間の小草堂、幾片の風英、露沼に翻
 る、新詩寫し得て彩箋香し、尾山を發す途中の聯句に、三
 首、一を録す、春山一路梅に背いて歸る、慎、猶ほ殘香の
 客衣に在る有り、聚、他日此の遊應に夢に入るべし、慎
 落花啼鳥故園の扉、聚。

劉青田の新春の詩に、昨夜東風來る、我が門前の柳を吹
 く、柳芽黃して未だ全からず、草根青已に有り、鶉鳩屋上
 に鳴く、我に勸めて春酒を嘗めしむ、我が髮日に已に白
 し、我が顔日に已に醜し、尊を開いて聊か情を怡ばす、誰
 か能く身後を計らん、此の詩、恰も余の爲に老況を言ふ
 に似たり、春初一酌、之れを讀みて悵然たり。

客冬、塾生相謀、刻余詠史百絶、并及茲篇、是余少時病中割記、文字蕪陋、固不足傳、然亦一二載、先師亡友事、距今三十餘年、邈如隔世、不勝追感、於是更加刪補、分成三卷、名曰鈕雨亭隨筆、以其起稿于此也、老後管見所得、別有稿黃漫錄、以俟他日之舉。

弘化戊申初春

夢亭山人識

客冬、塾生相謀り、余の詠史百絶を刻し、竝に茲の篇に及ぶ、是れ余の少時病中の割記、文字蕪陋、固より傳ふるに足らず、然れども、亦一二先師亡友の事を載す、今を距ること三十餘年、邈として隔世の如し、追感に勝へず、是に於て、更に刪補を加へ、分ちて三卷と成し、名づけて鈕雨亭隨筆と曰ふ、其の稿を此に起すを以てなり、老後管見の得る所は、別に稿黃漫錄あり、以て他日の舉を俟つ。

弘化戊申初春

夢亭山人識

組雨亭隨筆卷下終

日本時話叢書

門人
奧中
百村
千景
之養
同按

三〇